

刹那と守理たちの無人島漂流記

Dr. クロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある時、ダ・ヴィンチの計らいで休暇を貰い、船に乗った刹那達。偶然遊びに来ていて一緒に乗る事になった平行世界の自分である守理達と共に楽しい旅になると思われたが船が事故に遭い、一同は無人島に流れ着いてしまう。

今、刹那と守理達の無人島生活が始まる。

目次

第一幕く漂流く	1
第二話く拠点作りく	20
第三話く別の食糧探しく	29
第四話く二日目、修復と発見く	40
第五話く探索と思い出した事く	55
第六話く巨大狼く	65
第七話く巨大土竜く	76
第八話く巨大避役（カメレオン）く	83
最終日く最後の番人と迎えく	90

第一幕く漂流く

それはとある日の事であった。

刹那「え、休暇？」

ダ・ヴィンチ「ああ、そうだよ。魔術協会から刹那ちゃんに二週間の休暇が与えられたんだ」

彼らのお蔭でね…とダ・ヴィンチは傍にいたカエサルやモリアーティを見る。

カエサル「ふふ、私と彼のならたやすい事だ！」

モリアーティ「と言う訳だマスター。我々からのプレゼントだ。二週間の間バカンスを満喫してくれたまえ

刹那「ありがとうカエサル！教授！」

お礼を述べた後に準備だ準備！と駆け出す。

3分後

刹那「つて事でバカンスにゴー！」

イリヤ「ゴー♪」

Wクロ「ゴー!!」

美遊「ご、ご」

元気よく言う刹那にイリヤやWクロがそう言い、美遊もおずおずと言う。

刹那やイリヤ達以外にジャックや茨木に大人でドレイクと教授も同行する。

マシユ「行つてらっしゃい先輩！バカンス楽しんできてくださいいね！」

刹那「ありがとうマシユ。お土産買ってくるからね」
そう言つてから刹那達はバカンスへと向かった。

☆

く港く

刹那「へー、これが乗る船？」

モリアーティ「うむ、そうだ」

ほわーと目の前の船にイリヤ達と共に声を漏らす。

ドレイク「ほう、なかなかの船じゃないか」

ジャック「大きいー！」

目を輝かせるジャックの後に刹那はメンバーを見渡す。

刹那「全員居るよね？」

イリヤ&ジャック「「居まーすー！」」

モリアーティ「うむ、ちゃんと全員揃っているようだネ」

確認した刹那はんじやあ行こうか！と船へと乗り込む。

刹那「うわー、凄いな！」

ドレイク「中もかなり豪華だねえこりや」

中に入った後、その内装に誰もが感嘆の声を上げる。

イリヤ「す、凄すぎるよ…」

G Oクロ「こんなに豪華な船、良く取れたわね」

モリアーティ「まあそこは交渉でネ！いや〜話を分かってくれて助

かったよ」

はははははは！と笑うモリアーティにうーんホントもう敵に回したくないなと刹那は思いながらドレイクに言う。

刹那「ん？あれって…」

ドレイク「ん？どうしたんだいマスター？」

言おうとして刹那は何かを発見し、ドレイクは聞く。

刹那「守理ちゃん達じゃない?！」

イリヤ「え?!」

誰もが見ると確かに守理達がいた。

美遊「あ、本当…」

刹那「おーい！」

守理「ん、あ！刹那！そっちのサーヴァントの皆とイリヤちゃん達も！」

刹那が声をかけると守理も気づいて久しぶり〜と手を振る。

刹那「守理ちゃん達も乗ってたんだ！」

守理「いやーははは；」

アーチャー「丁度そちらのカルデアに出向いたらどうせならと言っ

事で来た訳だよ」

マルタ「そうそう」

駆け寄る刹那に守理は首を掻き、アーチャーがいる理由を言う。

刹那「あ、そうなの？」

イリヤ「凄い行動力…」

ティーチ「うん拙者も驚きでしたぞ；」

唾然とするイリヤに守理側のティーチは分かるとうんうん頷く。

アンデルセン「全く、のんびりできると思いきやこれだからな」

キアラ「まあまあアンデルセン」

ヘブンズ「良いではないですかこういうのも」

刹那「あ、ダブルキアラさん」

イリヤ「…ってダブル!?!」

ぶーたれる守理側のアンデルセンの頭に自身の大きい所を乗せるキアラとヘブンズに刹那はわおうとなり、イリヤは驚く。

キアラ「あら？」

ヘブンズ「なぜ驚くのでしょうか？」

アンデルセン「そりやあ驚くだろう。普通に子供によろしくないお前が2人もいたら普通にな」

刹那「歩く18禁だもんね」

モリアーティ「うむ、確かに」

クロ「と云うか頭に胸を乗せられて重くない？」

首を傾げる2人にアンデルセンがそう言い、刹那とモリアーティが同意する中でクロが聞く。

アンデルセン「重いに決まってるだろうが!!」

イリヤ「あ、やっぱり…」

くわっと目を開けて叫ぶアンデルセンにイリヤは冷や汗を掻く。

ルビー「大変ですね。ま、これも惚れた弱みですかね」

サファイア「姉さん、そんな事言ったら…」

それにルビーがからかい、サファイアが注意しようとする前に…

アンデルセン「さて、こいつの羽はどこまで伸びるのだろうか」びよーろーろーん

ルビー「いだだだだだだだだ?!」

イリヤ「自業自得だねルビー」

刹那「アハハハハ；」

アンデルセンにより羽を掴まれて強く引っ張られ、悶えるルビーはイリヤと刹那は苦笑する。

茨木「何をやっているのだお主らは…」

ジャック「おかーさん！早く部屋いこーよ！」

刹那「あ、うん。そうだね」

微笑ましいなどジャックに引っ張られる刹那にアーチャーは微笑む。

にゃーん

アーチャー「む？黒猫…」

そんなアーチャーの前を黒猫が通る。

GOクロ「へ？黒猫？」

クロ「なんで船の中に黒猫？」

守理「紛れ込んだのかな？」

走って行く黒猫を見送った後にそれじゃあ！と守理も自分の部屋へと向かう。

アーチャー「そう言えば教授、そちらはどの部屋かな？」

モリアーティ「こちらの部屋は758室だね。そちらは？」

見届けながら聞くアーチャーにモリアーティは答える。

アーチャー「奇遇だな。我々はその隣の759室だ」

アンデルセン「ちなみに女子組と男子組で分けられている。俺としては大助かりだな」

ティーチ「理由はお察し」

モリアーティ「おお、それは奇遇だな」

寝るまで話すかと言うモリアーティの提案に良いですな〜とそれぞれ談義しながら歩く。

数時間経って午後7時になってから夕食を食べる為にレストランへと向かっていた。

ジャック「わーい！」

刹那「ジャック、走ると危ないよー」

モリアーティ「ははは、料理は逃げないよ」

ティーチ「うーん、この仲の良い姉妹を見るお父さんな感じ」

GOKURO「悪の教授なのにね」

走るジャックとそれを注意する刹那を見てるモリアーティを見て

ティーチはそう述べて、GOKUROも同意しながらそう返す。

アーチャー「まあ、本人も結構今の状況を気に言ってるから良いの

ではないかな？」

ドレイク「そうそう。こういうのはおもいつきり楽しまないといけ

ないよマスター」

わはは！と笑うドレイクに前を歩いていた刹那はうんと返す。

守理「どう言うのが出るかなマルタ？」

マルタ「そうね…もし好きなの出来たら作ってあげるわよマス

ター」

ありがとねと言う守理にマルタも早いわよと苦笑する。

刹那「あ、あそこがレストランじゃない？」

美遊「どういう料理があるんでしょう」

誰もがワクワクしながらレストランに入る。

イリヤ「わー！バイキングだー！」

並べられた料理にイリヤや刹那達はうわーと声を漏らす。

守理「凄いねマルタ！」

マルタ「確かに色々あるわね」

刹那「デザートも沢山あるね」

誰もが並べられたのに声を漏らした後にティーチがお先と肉を

取って食べる。

ティーチ「うんまーい！」

アンデルセン「貴様！抜け駆けはさせんぞ！」

ジャック「ずるーい！」

ドレイク「こりやあ負けてられないね〜」

それに我さきに向かうのを見る中でアーチャーは急がなくても良

いだろうにとぼやく。

刹那「んー、美味しいねこれ」

イリヤ「そうですね〜」

同じ様に置かれていたフライを食べた刹那は顔をほころばせてイリヤも同意する。

アーチャー「しかしよく取れた物だな。見るからに高級だから結構高かっただろうに」

モリアーティ「いや〜まあそれは交渉でネ」

ふふふと笑うモリアーティに深く聞かん方が良いなどとアーチャーはそう考えて聞く事を止めた。

ルビー「いやはや、黒いですね教授」

サファイア「(姉さんもある意味負けてないと思います)」

そう言うルビーに妹はそう心の中で呟く。

イリヤ「刹那さん、こっちのハンバーグも美味しいですよ」

刹那「こっちのローストビーフもおいしいよ」

各々にワイワイと食事をしていく。

マルタ「はいあーん」

守理「いや、あの、ちゃんと食べれるから」

顔を赤くする守理に冗談よとマルタは笑う。

刹那「ん？何赤くなってるの？」

守理「いやあ、誰だつてあーんなんてされたら顔を赤くしない？」

刹那「あーなるほど」

イリヤ「た、確かに；」

そう言われて刹那は納得し、イリヤも頷いてチラリと見る

キアラ&ヘブンス「はいあーん」

アンデルセン「ええい！両方同時に出すな！」

あつちもあつちで挟まれていると言う。

イリヤ「凄いですよねあちらは；」

刹那「そうだねえ；」

正装で身を包んでいるが目立つ豊満な胸に挟まれているアンデルセンは注目を集めていた。

ティーチ「羨ましいと思えねえですな」

モリアーティ「まああの二人に挟まれるのはネ」

それを肉をメインに食べていたティーチは同情した目で見ながら言い、モリアーティも同意する。

守理「んー、マシユも連れてくればよかつたなく色々勉強中で断られて」

刹那「え？そつちも？」

食べた後にそう言った守理のに刹那も反応する。

守理「あ、そつちも？色々と知ってる人がいるからその人に色々教えて貰いたいので断られて」

刹那「そうそう。なに教えてもらっているんだろうね？」

イリヤ「あ、私も気になります」

誰もがワイワイ話して過ごしていると：

ドレイク「ん？今揺れなかったかい？」

ティーチ「あ、確かに」

真つ先に気づいたドレイクのにティーチも同じように反応する。

守理「え？揺れたって大きな波とかで？」

ティーチ「いや、これは違いますな」

ドレイク「こいつはちよつとマズイ気がするねえ」

刹那「え？マズイって…」

その言葉と共に警報が鳴り響き、避難する様にアナウンスが流れる。

アーチャー「……………あの黒猫はこの伏線か…orz」

ティーチ「アーチャーどんんんん!!」

守理「い、いやアーチャーのせいじゃないよ；」

刹那「そんなことより取りあえず避難しないと！」

モリアーティ「うむ！善は急げだ！」

落ち込むアーチャーを励ましながら各々に駆け出す。

救命具も装着しながら各々係員の案内で他の客と共に進む。

守理「まさかこうなるとはね；」

刹那「バカンスがまさかの展開だね」

そう会話しながら各々に救命ボートに乗り込む。

丁度守理と刹那達はそれぞれ乗り込めたのでそのまま降ろされる。
美遊「大変なことになったね…」

イリヤ「そうだね美遊…」

アーチャー「まあ、助かったのだから良しと…」

救命ボートに乗りながら沈んでいく船を見る2人にアーチャーは
言おうとして…

にやあく

キアラ「あら？」

ひよっこりとキアラの胸元から黒猫が現れる。

アンデルセン「…おい、何入ってるんだこの墮牛女」

キアラ「丁度いたので、可哀想でしたから懐に」

イリヤ「…なんか嫌な予感がするんだけどー!？」

刹那「同じく…」

ピシッ、ピュー

詰め寄るアンデルセンに返したキアラを見ながらイリヤが叫んだ
後、守理は冷たさを感じてみると輝と水漏れが起こっていた。

守理「輝が!!水が!!」

アーチャー「いかん!」

刹那「早くふさがないと…」

ビシビシビシッ!

「えっ…」

誰もが慌てて補修しようとするどひび割れが大きくなって行き…

ヘブンズ「あ、これは壊れますね」

アンデルセン「悠長に言つとる場合か!」

GOKURO「それよりどうするのよ!?!」

誰もがあわあわした時…

マルタ「来なさい!タラスク!」

壊れる直前、救命ボートの下からタラスクが出現する。

マルタ「ふう…これでひとまずは大丈夫ね」

守理「あ、ありがとうマルタ!」

刹那「タラスク泳げたんだね」

安堵の息を吐くマルタに守理は礼を言っつて刹那がそう言う。
マルタ「まあね。後は適当な陸地に…」
タラスク「あー…姐さん。それは無理かも」
なんでよ？と首を傾げるマルタにタラスクは言う。
タラスク「運悪く、巨大な津波が接近中ツス…」
確かに遠くからこつちに向けて大きい波が迫っていた。
ティーチ「うそおーん!？」
モリアーティ「不連続きすぎだろうこれは!？」
それに誰もが絶叫してる間に…津波に飲み込まれた。

☆

ー…：…しろ…：…：…しっかりするんだ守理！ー

守理「う、ううーん…」

呼びかけられる声に守理は目を開けるとアーチャーの顔が目に入る。

アーチャー「目が覚めたか…」

守理「アーチャー…皆は!」

ガバツと起き上がって周りを見るとぴゅーと水を吐くティーチやキアラとヘブンズの人工呼吸と言う名のキスを防いでいるアンデルセンにマルタ、イリヤを膝枕したアイリスフィールや刹那と共にいるモリアーティにクロとG Oクロに美遊にドレイクやジャックが全員いるのに気づいて安堵する。

アイリスフィール「あら、目が覚めたのね」

刹那「大丈夫？守理ちゃん」

声をかける刹那に守理は大丈夫と頷く。

守理「それより此処は？」

刹那「えつとね…無人島」

守理「え”また?”」

思わず出たがすぐさま手をパンとさせる。

守理「あ、でも今回はドレイクとティーチが居るから大丈夫なんじゃ…」
ティーチ「いやあ…それが困った事態でござりまして…」

大丈夫だよな?と見る守理にティーチはそういう。

守理「え?ティーチやドレイクが宝具で船を出せるじゃん」

ドレイク「そうしたいのはやまやまなんだけどねえ…宝具が出せないんだよ」

同じ様に困った顔をするドレイクに守理はええ!?!となる。

アーチャー「私と教授の見立てだが、この島は一種のAMF:魔力結合を解いて魔法を無効化すると言う地帯になっていて、しかもとてもない高魔力も無効にされるから宝具でさえも使用できないと言う状態になっているからここではサーヴァントも一般人とほぼ変わらないと言う事だ」

守理「そうなの!?!」

刹那「厄介な場所に漂流したねえ」

うへえとなる守理と刹那に全くだとアンデルセンはぼやく、

アンデルセン「キアラが荷物をあらかた魔法で仕舞っていたがこの島のお蔭で出せんと言う状況だ。食料も少ないぞ」

イリヤ「えつともしかしてこれって…」

クロ「この島でサバイバル活動しろって事ね」

刹那「んじやまず拠点作らないとね」

守理「そうだね。それには材料の木とか集めないと…」
だね!と頷いてから守理は気づく。

魔力が使えない。

←

サーヴァントの主な攻撃に使用するのは魔力

←

その魔力が使えない。

←

前に漂流した時より厳しい

守理「うわあ…改めて考えると前に漂流した時よりさらに厳しいや」

刹那「あー確かに」

美遊「…大丈夫かな?」

サファイア「アーチャー様の投影や皆様の武器が使用出来ない以上、自力のでやるしかないかと…」

眩いた事に同じ様に至った刹那は頭を抱えて美遊のにサファイアはそういう。

ティーチ「うわお、なんと言うかマインクラフトとかそういう感じのすな」

アンデルセン「あれよりも厳しいけどな」

イリヤ「そうだね；」

うへえ…と漏らした後にアーチャーが仕方がないと適当な石を手に取る。

アーチャー「とにかくやるしかない。地道に石や木の棒で道具を作ってしばらくの住居を作り、食料も見つけないとな」

モリアーティ「うむそうだね」

頷いた後にジャックがんとする顔をした後に森の中へと歩き出す。

刹那「ジャック？どうかしたの？」

ジャック「あのね。こっちから甘い臭いがする」

守理「甘い臭い？」

なんだろうとジャックの後に続いて森に入る。

しばらくすると…それが目に入った。

沢山並ぶ木にその先端で実っている果実たち

守理「果物だ!!」

イリヤ「しかもこんなに沢山!？」

おおおおお！と誰もが目を見開く中でティーチが試しに実っていたバナナの1つをもぎ取って食べる。

ティーチ「おお、これは美味しいですぞ！」

GOKURO「毒はなさそうね」

食べて絶賛するティーチの後にGOKUROもリンゴをもぎ取って食べてからそう言う。

マルタ「色んな果実があるわね。メロンにバナナ、ブドウに拳句の果てにパイナップルとイチゴまで…」

刹那「凄いねこれは…」

様々な果物に誰もが驚く中でアーチャーは土を見る。

アーチャー「ふむ良い土だ…さらにこの環境…様々な果物があるのは渡り鳥が休んでる間に排出した糞の中にあつた種が発芽し、雨などで水分も取れて実つたのだろう」

アンデルセン「まあ、そのお蔭でひもじい思いをするのはしのげたな」

モリアーティ「次は飲み水と住居をなんとかしないと」

観察して言うアーチャーの後に言うモリアーティに何を言っているんだとアンデルセンは呆れる。

アンデルセン「確かに飲み水は必要だが、そこらへん見つかるまでは果物をジュースにすればよいだけだ」

刹那「まあそうだけどあくまでジュースは代わりだからね。早く見つけたほうがちゃんと水分摂れると思うよ

イリヤ「あく確かにフルーツジュースって水分より糖分が多そうだよね」

キアラ「あらあら、それだと太りやすくなりそうですね」

ヘブンズ「けど、その心配もないかと」

奥を見ていた2人の言葉になんとと思ひ、2人が見ていた方を見つみると…綺麗な水が流れていた。

守理「うわ、綺麗」

美遊「湧き水ですね」

試しにアーチャーは手で水を掬って飲んでみる。

アーチャー「うむ、なかなか良いなこれは」

ティーチ「飲み物のは木でコップの様なのを造れば良いだけですか」

モリアーティ「もしくははこのヤシの実を使うのはどうだろうか」

そう言って実っていたヤシの実を見せて言う。

アーチャー「確かに器的にも丁度良いな…後は上手く割るだけだな」

守理「あ、そうか」

刹那「どうやって割ろうか」

うーんと刹那と守理が唸るがアーチャーは石と手ごろな太さの木の棒を見つけると石をしつかりと木の棒に突き刺す。

そして確かめる様に軽く上下に振るう。

アーチャー「ふむ、なんとかしつかり刺さったか」

イリヤ「あつ、それって」

うんと頷いた後にそれを見るアーチャーはヤシの実を狙いを定め

：

アーチャー「ふん！」

ブン!!

勢いよく振るうと石はヤシの実に突き刺さって：ヤシの実は綺麗に割れる。

アーチャー「ふう：文明の利器は偉大だ」

美遊「す、凄い…」

モリアーティ「ふむ、綺麗に割れているな」

作り上げた物、石斧を見てそう述べるアーチャーの後にモリアーティはヤシの実を手にとってうむうむと感嘆する。

アーチャー「とにかく、石斧を主に作っていこう」

ティーチ「そうですね」

刹那「あ、いい感じの蔦見つけた！」

提案するアーチャーに誰もが頷いた後に刹那がそう言って見せる。

守理「あ、石と棒を縛ってさらに外れ難くするんだね」

刹那「それもできるし干すとき使えるかなと思つて」

イリヤ「物干し竿替わりですね！」

そういう事とウインクする刹那の後にティーチが使えるそうな蔓を見つける。

ドレイク「私達は砂浜に行つてみようか。何か見つかるかもしれないねえ」

クロ「了解」

マルタ「私も行くわ。タラスクを出せば楽なんだけどね…」

刹那「んじや私達は拠点作るのに適しているところ探そうか」

アーチャー「なるべくこの果物の群生地に近い所が良いな。なおかつ見晴らしの良い所があれば良いがそこらへんはどこかに見晴らし台を作ればいいしな」

そう各々に決めて歩き出す。

ちなみに砂浜に行くのはドレイクを筆頭にマルタ、クロ、GOクロ、ティーチ、守理、茨木、キアラの8名である。

茨木「では行ってくる」

キアラ「期待しててくださいね」

アンデルセン「変なの拾うんじゃないぞ」

刹那「(拾いそうだな;)」

注意するアンデルセンのを聞きながら刹那はそう思った。

☆

守理「さあて、浜辺に着いたもの：何かあるかな？」

茨木「ふむ、色々ゴミのような物が流れ着いているな」

クロ「確かに色々あるわね：」

少しして浜辺に着いた後に見渡す守理の隣で茨木とクロは落ちているのを見て各々に言う。

キアラ「あら？」

GOクロ「何か見つけたの？」

はい：と言ってからキアラは何かを手に取り：

キアラ「ビキニの上部分」

守理「いきなり引いた!？」

クロ「なんで流れ着いているのよ：」

見せられたのに守理は叫び、クロは呆れる。

ティーチ「えつと：空き瓶がありましたな。これに水を入れて涼しい場所に置いとけば保存できそうですな」

茨木「こつちはなにやら青い布を見つけたぞ」

そうやって数本の空き瓶を見せるティーチの後に茨木は青い布を見せる。

守理「これは：ブルーシートだね」

マルタ「綺麗にして乾かせば床としてしけそうね」

G Oクロ「こつちには大きな木の板があるわよ」

そう言つてG Oクロは丁度、成人男性2人分位の大きさの木の板を持って来る。

守理「ああ、これも乾かせば床に使えるな…布も天井のに使えば上手く屋根に使えるだろうし」

マルタ「色々と見つかつて良いわね」

ドレイク「こりや材料には困らないねえ」

そう会話しながら使えるものを集めて行く。

一方の拠点建築場所探索組は…

ヘブンズ「はあくこう抱き締めるのは良いですね」

アイリ「それは分かるわく」

アンデルセン「だからつて抱き上げるな、胸の間に挟むな！」

イリヤ「あははは；」

刹那「あ、あそこかどう？教授」

後ろでアンデルセンとイリヤがヘブンズやアイリに抱き抱えられてるのを後目にそう聞く刹那にモリアーティはふむと顎を摩つて観察する。

モリアーティ「確かに、近くにあの湧き水があり、果物を持って来るのに負担もない。日当たりも良いし拠点もちやんとしたのを作れば雨が降つても問題なし。丁度良いね」

アーチャー「では、拠点を作る為のを集めないとな」

刹那「そうだね。まずは雨風をしのげるものの材料集めた方が良いかな？」

そう評するモリアーティのを聞いてアーチャーと刹那はそういう。

ヘブンズ「それでどう言うのを造るのですか？」

アンデルセン「やはり雨風もしのげる木の家が良いだろう」

ジャック「そうなのお母さん？」

刹那「んー、木の家作るとしても問題は屋根だよな」

そう提案するアンデルセンのに刹那はそういう。

アンデルセン「確かにきつちりとしないと雨漏りし兼ねないから

な」

モリアーティ「だがきつちりしたのを作るのには道具等が足りない
…」

そこではあるな…とモリアーティの言い分にアーチャーも唸る。
アンデルセン「固定する釘の様なのとかノコギリのような奴もない
からな」

刹那「困ったね…」

アーチャー「斧やスコップ、後は桑にノコギリ以外で斬るのは石と
木を使えば出来上がるが…それ以外だと浜辺組の結果次第だな」

イリヤ「クロ達、どんなもの持ってくるんだろ…」

美遊「気になるね」

そう言うアーチャーにイリヤと美遊は心配になる。

刹那「洞窟とかあったら良かったんだけどねー」

アンデルセン「まあ、そこらへんは集まらなかった時にだな」

そう呟く刹那にアンデルセンがそう言う。

イリヤ「あ、帰ってきた！」

ルビー「なんだか色々持っているみたいですよ！」

しばらくしておーいと言う声と共に守理達が来る。

守理「お待たせ〜」

マルタ「意外と流れてる物ねホント」

美遊「お帰りなさい。何か良いのあった？」

クロ「まあ色々あったわ」

聞く美遊にクロは頷く。

ティーチ「空き瓶やペットボトルですぞ〜熱消毒などもすれば水
入れられる容器になりますぞ」

マルタ「ブルーシートってやつを見つけたわよ」

GOクロ「木の板も見つけたわ」

ドレイク「後、スコップもあったよ。運が良いね」

そう言って各々に見つけたのを見せる。

キアラ「それとビキニです」

ヘブンズ「あら面白いですね」

アンデルセン「貴様は俺をダチヨウ倶楽部みたいにする気か」

刹那「ふうむ…これで拠点製作か」

アンデルセンのをスルーして刹那は集まった物を見る。

刹那「どれか屋根に使えるかな？」

アーチャー「この中でならブルーシートが雨避けになりそうだが…
いかんせん長さがな…」

モリアーティ「木の板も大きさが足りないな…」

アンデルセン「まあ、こうなったら果物の木以外の木を何本か伐採
するのかなさそうだな」

ううむと唸る2人にアンデルセンはそういう。

刹那「そうだねえ…。ん？待てよ確か…」

アーチャー「ん？どうしたんだ刹那」

刹那「…：ねえ、バナナの葉っぱを重ねて作れないかな？」

守理「バナナの葉っぱで？」

そう提案する刹那に守理は首を傾げる。

刹那「ほら、葉っぱをこうやって重ねてたりしてできないかな？」

そう言われてアーチャーとモリアーティは成程と頷く。

アーチャー「確かに何重も重ねれば雨漏りも心配しないだろうな」

モリアーティ「それに足りなくても他の大きな葉っぱを使えば十分
足りるだろう。ナイスアイデアだなマスター」

えへへと照れる刹那の後にナイフの代わりはこれでいけるなど

アーチャーはスコップを手取る。

イリヤ「それじゃあ早速大きい葉っぱを集めよ！」

ルビー「ガンバです」

サファイア「ここだと私達は応援だけですな」

ティーチ「魔法が使えないですからな」

頷いた後に身軽なアーチャーと器用なジャックがバナナの木に登
り、すまんなど謝った後にバナナの木から葉っぱを数枚切り取る。

なるべく1本に集中せずに数本で取って行く。

ジャック「いっぱい取るよ！」

刹那「ジャック！いっぱい取ってね！」

元気よく登って行き、ジャックは石を上手く使って葉っぱを切り取って行く。

その下でジャックが切り取った葉っぱを美遊やイリヤ達がキヤツチする。

美遊「わつと」

GOKURO「よつと」

しばらくしてジャックは降りて来て、褒めて褒めてと刹那に近寄る。

刹那「沢山取ってくれてありがとねジャック」

ジャック「ありがとうお母さん！素材集めるより簡単だったよ！」
頭を撫でてあげる刹那にジャックはうにゅくと嬉しそうに目を細める。

守理「お母さんだね」

刹那「ん？そう？」

それを見てそう言う守理に刹那は首を傾げる。

守理「ウチの方はジャックは葉月ちゃんの子だから葉月ちゃんは普通に呼び捨てで私はお姉ちゃんだからさ」

刹那「あー、そっか」

そう言われて出会った時のを思い出して刹那は納得する。

守理「ちなみにアーチャーはオカンの人」

刹那「あ、それうちでも」

モリアーティ「彼はどこでも変わらないネー！」

うんうんと頷くモリアーティのに確かにと他のメンバーも同意する。

守理「それにしてもマシユ心配してなきや良いけど…」

刹那「騒ぎにはなってそうだけどねえ…」

マルタ「なってるかもね。だって高級な船よ。普通にニユースになつてそうだわ」

ティーチ「確かに」

イリヤ「でもなんで沈んだんだろ？」

アーチャー「考えられるのは…何かにぶつかったのではないだろう

か？」

モリアーティ「だがあの船を沈めれる程となるととてもない大きなさではないと無理だと思う」

そう言うアーチャーにモリアーティは顎を摩りながら分析する。

刹那「まあそんなことは後で考えよ？」

ルビー「そうですね。今はまず拠点を作らないと！」

誰もがルビーのに同意してある程度葉っぱが集まった後に建てる場所へと持っていく。

ひよんな事で無人島に流れ着いてしまった刹那達。

救助が来るまでの間、サバイバル生活をする事になるのであった。

第二話く拠点作りく

無人島へと流れ着いてしまった刹那達と守理達
まず彼女達は活動拠点を作る事にした。

守理「どういふ感じで組み立てようかな？」

刹那「まずは支柱かな？」

何から取り組むかを聞く守理に刹那はそう言う。

アーチャー「ふむ、やはりシンプルにそのまま突き立てるのかね？」

モリアーティ「いや、そうするとすぐに倒れてしまうだろ」

確認するアーチャーにモリアーティは否定する。

アンデルセン「ではどうする？」

モリアーティ「ふむ…そうだね…」

少し思案した後モリアーティは口を開く。

モリアーティ「横にして積み上げていく形で柱と共に壁を作り上げると言うのはどうかな？」

刹那「あ、それはいいね」

提案に刹那は了承し、んじやあ木の伐採だねと守理が言う。

イリヤ「いっぱい斬らないとね！」

ルビー「ですね〜んで斧を大量生産ですね」

マルタ「んじやあ手頃で丈夫な枝や固い石を見つけないとね」

ドレイク「あと丈夫な蔦もね」

誰もが領いた後にすぐさま何も実っていない木を探しに向かう。

ティーチ「自然が豊富だけに木も多いけど果物関係が多いでござる」

美遊「なかなか見つからないですね」

見渡しながら呟くティーチの隣で美遊も困った顔をする。

クロ「にしても広いわね」

GOクロ「ホントにね探索が一苦労するわね」

マルタ「後はこの熱さね。果物の育ちが良い様に暖かいから汗が出るわ…」

ぼやく2人のクロのマルタは額の汗を拭いながら言う。

刹那「しかも水分が多いから蒸し暑いし」

守理「確かに服とかね…」

お互いに来ていた服を見ながらぼやく。

ドレイク「確かにこれは服が濡れて気持ち悪いね」

ジャック「ベトベトする」

守理「着替えたいけど着替えがないしね…」

刹那「そう言えばよく葉っぱとかで服作ったりするけどできないのかな？」

顔を顰めるドレイクの隣でもジャックも嫌そうにぼやくと刹那がふとそう思いつく。

アンデルセン「無理だな。達人ならばともかく、我々の中にそんな奴はいないしな」

モリアーティ「材料もないしな」

だが、すぐさまアンデルセンとモリアーティが否定し、刹那はそうか…と呟く。

アンデルセン「牛女が仕舞ったのを取り出せれば良いがこの島のA MFでそれを出す為の作れないから厳しいしな」

キアラ「困ったものですね」

刹那「島から一旦出れば出せるのかな？」

そう言ったアンデルセンのに刹那はふと質問する。

アンデルセン「出来るだろうが、それが出来る範囲が何メートルかなのか分からん限り危険が大きいな」

守理「そうか…」

モリアーティ「まあもしもの時はやるしかないだろうな」

ヘブンズ「その時はアンデルセンをじっくりと慰めますわ」

キアラ「あらあらそう言うのはさせないですよ私」

そう言ったモリアーティの後にヘブンズとキアラはアンデルセンを胸に挟んでうふふと笑い合う。

イリヤ「い、色々と危険！」

刹那「まあもしもの時は裸になるしかないよね」

アーチャー「それは止めた方がいい…特に我々が死ぬ…聖女様に

よって」

マルタ「あなたが私をどう見てるかよくわかりました」

アンデルセン「だが貴様、守理の裸を見た者がいたらどうする？」

そう言った刹那にアーチャーが止めに入り、マルタが拳を鳴らす中でアンデルセンが聞く。

マルタ「記憶が無くなるまで：殴ります☆」

ティーチ「やだ、この聖女様、マジで怖い；」

イリヤ「は、裸はちよつと；」

刹那「まあこれは最後の手段だからね」

素敵な笑顔で宣言された事にティーチは口を押えて戦慄する隣で顔を赤くして恥ずかしがるイリヤに刹那はそう言う。

アーチャー「流石にうら若き乙女が羞恥心もなしにそういうのをやるのはダメだろう。なあ教授」

モリアーティ「まーうちのマスターはそういうところが鈍いんだよねーこれが」

ティーチ「それ、男の拙者が言うのもなんですが：B B Aはともかく女としてどうなんでしょうかね…」

ドレイク「まあそういうのもいいんじゃないか？人それぞれじゃないかそういうのは」

思わずそう言うティーチにドレイクはそう言う。

キアラ「同じ女としてイリヤさん一言」

イリヤ「もうちよつと恥じらいを持った方が良いと思います」

守理「確かにドレイク船長はともかく、刹那には平行世界の自分としてちゃんと恥じらいあつた方が良いな…」

刹那「えーだって暑いじゃん」

サファイア「ちなみに刹那様は暑い中だと服装はどうお過ごしでしょうか？」

2人に言われてそう返す刹那にサファイアは聞く。

刹那「えっと、タンクトップに短パンだよ」

美遊「凄くラフですね」

守理「それ結構普通に危ないね」

モリアーティ「色々見えちゃうんじゃないのかいそれ；」
答えた刹那のに守理はそう言い、モリアーティも冷や汗掻いて言う。

アーチャー「全くだな。そっちには起こしそうな男がいるのに…」
ティーチ「(それ衛宮士郎氏の事を言っておりますな)」

マルタ「(さり気無く自分もデイスってるわね)」

イリヤ「(士郎さんの事かな?)」

腕を組んでやれやれと頭を振るアーチャーに上記3名はそう思った。

アンデルセン「んで、木を見つけといたぞ」

刹那「お、これは良い木だね」

そんなメンバーが話してる間に探索していたアンデルセンの言葉に刹那は見ておと声をあげる。

確かに大きな木で立派なのだが…

アーチャー「…倒すのに時間がかかりそうだな」

守理「確かに；」

モリアーティ「それに運ぶのも大変じゃないかい？」

予想以上に大きくて、切って倒した後のをどうするかを考える必要があった。

アーチャー「さて、どうする？私としては斬り倒した後に適度な長さに斬ってから運ぶ事にしたいのだが」

刹那「じゃあそうしようか」

提案するアーチャーに刹那や他のメンバーが同意した後にアーチャーはティーチと共に交互に斧を振るう。

マルタ「これはしばらくかかりそうね…斬れるまでの間に果物以外に食べ物がないか調べる？」

守理「ああ、確かに」

刹那「果物以外って魚とか？」

アイリ「魚も大事だけど島に果物以外にも食用になる奴がないかとかね」

そう提案するマルタに守理が頷く隣で聞いた刹那にアイリがそう

言う。

G Oクロ「山菜とかいいかもしれないわね」

イリヤ「キノコは危ないよね…」

ヘブンズ「マジカルステッキのお2人で判別は出来ないのですか？」

不安そうに呟くイリヤにヘブンズがそう聞く。

イリヤ「ルビーたちそう言うのできる？」

ルビー「ふふふふ、お任せください。あんなキノコや色んなキノコを見極めてあげますよ！」

サファイア「わざと変なキノコ入れないでくださいね姉さん；」

美遊「お願いねサファイア」

という訳で斬るのをアーチャーとティーチに任せ、見る役としてモリアーティも残って他のメンバーで探しに向かった。

☆

1時間後、果実の実った木で広場の様になっている場所で拾った物を見ていた。

マルタ「たつぷり見つかったわね…危ないのも含めて」

イリヤ「テングダケって猛毒だよね…」

守理「豊かな自然とは別に危ないのもあったね…；」

アンデルセン「まあ、それ以外にもマツタケやらトリユフも見つかったのは凄いがな…」

どういう環境しとるんだここは…とアンデルセンはぼやく。

刹那「山菜もいっぱいあったね」

マルタ「これでしたらしくは困らないわね」

イリヤ「そうですね！」

うんうんと満足そうにしてるとパキパキと言う折れる音の後にドシンと言いう倒れる音が響き渡る。

マルタ「あ、終わったみたいね」

刹那「そのようだね」

時間かかったな…と思っているとモリアーティが来る。

モリアーティ「お、どうやら沢山取れたようだなマスター」

刹那「うん、大量だよー！」

マルタ「そつちは2人が来ないのは…予想以上に大きかったから運びやすくするために切り分け中？」

聞かれてモリアーティは全くもってその通り…と肩を竦める。

イリヤ「あんなに大きかったから仕方ないですね」

ルビー「ですね。どれ位出来るんでしょうね」

アンデルセン「まあ、あんまり細かくし過ぎると家の材料ではなく薪になるだけだな」

刹那「取り敢えず見てみようか」

という訳で様子を見に行くと長さを図っているアーチャーとティーチの姿があった。

アーチャー「む、そつちは終わったのか」

守理「まあね」

刹那「長さを図ってるの？」

ティーチ「そうなのですよ。こんだけ長いので一部は薪などの火を起こす奴に使おうかと」

聞く刹那にティーチがそう答える。

マルタ「柱にするとして、何メートルが良いかしら？」

モリアーティ「1.8〜2メートルぐらいがいいんじゃないかね？」

アーチャー「ふむ、大体の長さが約10メートルだったから1本の5本に分ければ良いな」

刹那「そうだね」

ティーチ「まあ…これからやる事は…さらに数本斬らないといけない事案発生するんですがな！」

そう言うアーチャーと頷いた刹那の後にティーチがそう言う。

マルタ「確かに拠点を作るにしても沢山必要ね」

イリヤ「確かに…」

守理「大体何本使う事になるかな？」

マルタのにイリヤと守理は唸る。

モリアーティ「ふむ、この太さなら…大体5メートルあるから約5

〇本位かな？」

刹那「沢山いるねー」

ティーチ「そして我々が働く。分かります」

ドレイク「そうと決まればさっさとやるよ！」

美遊「は、はい！」

誰もが領いて行動に移る。

まずは斬り倒した木から木の枝を切り落として小さな丸太にしてマルタやイリヤ達が運ぶ。

大きい丸太はアーチャーやティーチなどの男子勢が運ぶ。

ティーチ「男子勢と言つても拙者とアーチャー殿だけでござるけど！」

アンデルセン「作家に重労働させるな」

モリアーティ「アラフィフにもね！」

アーチャー「ティーチ。嘆くよりも動くんだ。その2人は無視だ」

ひーひー言いながら運びつつ叫ぶティーチに軽いのを持つて運ぶアンデルセンとモリアーティがそう言い、アーチャーがそういう。

守理「うーん。2人が大変；」

刹那「私も手伝おうか？」

マルタ「流石にあの大きさは2人には厳しいと思うわよ？」

それを見て言う守理と手伝いを申し出る刹那だがマルタが横から言う。

ティーチ「台車みたいなのがあればな…」

イリヤ「あ、それならさつき見つけたんですけど…」

その言葉を聞いたティーチとアーチャーはイリヤの方を向き…

ティーチ「早く行って下されよ!!!もう一本を汗だくで運んじやったでござるよ!!!」

イリヤ「ご、ごめんなさい!ただある場所がその…廃村みたいなところで」

アーチャー「廃村だと?」

刹那「昔は村があったのかな?」

叫ぶティーチに謝罪してから答えたイリヤのにアーチャーが眉を顰める。

アーチャー「そうになると…教授、もしかすると拠点作りは楽になるかもしれない！」

モリアーティ「ふむ、確かにその廃村にもしかしたら多少直せば住める場所があるかもしれないし」

クロ「なくても材料が豊富にありそうね」

早速メンバーはその廃村へと向かった。

☆

アーチャー「これは…ボロボロにはなつてがいるが直せば使えるな」

辿り着いた廃村の様子を見てアーチャーは呟く。

確かにアーチャーの言う通り、所々が壊れていたりするが、どれもが形を残してはいる。

モリアーティ「見たところ数十年前に廃村になったようだね」

アンデルセン「人の死体などが無いという事は島を捨てたかあるいは…まあ、前者が好ましいがな」

刹那「森は此処から少し歩くぐらいだね」

マルタ「拠点にするなら丁度良いかもね。家も沢山あるし、男女で分ける事も出来るわね」

建物の荒れ具合から推測するモリアーティの後にそういうアンデルセンの後に刹那はかかった時間を呟き、マルタがそう言う。

アーチャー「ここに何か残っているならそれを使って修復をすれば良いな」

ドレイク「ただ屋根の方はマスターのアイデアを使うしかないようだねえ」

そう言うアーチャーのにドレイクは屋根に開いた穴を見て言う。

アーチャー「そこは私や身軽なジャックが上って葉っぱを上手く繋げて飛ばない様に壊れない程度の重さの石を置いてやった方が良いな」

モリアーティ「井戸の方は…ふむ、枯れてるな」

アイリスフイール「そこはあの水を汲んでおけば良いだけよ」
中央にあった井戸の中を覗き込んで言うモリアーティにアイリス
フイールがそういう。

アンデルセン「まあ、とりあえずは今後の目処が付いたな」

刹那「そうだね」

しばらくは廃村を拠点に捜索隊が来るのを待つサバイバル生活を
すると言う事

しつかり生きないとねと刹那は気合を入れる。

守理「お風呂に使えそうなドラム缶があつたよ！」

イリヤ「机、見つけてきました！」

キアラ「色々と見つかりますね」

刹那「あ、荷車見つけた」

続けて荷車を見つけ、これで運ぶのが楽になりますなどティーチは
安堵の息を吐く。

イリヤ「ずいぶんボロボロだね」

ルビー「確かにそうですね」

アーチャー「これは……大丈夫だな。しつかり直せば普通に使え
る。なあにこう言う修理系ならエジソン達に劣るが得意だから任せ
たまえ」

そう言つて見つけて来たであろう道具で運んで来た丸太の1つを
使つて作業を開始するアーチャーを横目に刹那は良しと皆を見る。

刹那「んじやみんな！この廃村で救助来るまで頑張ろー！」

一同「おー！」

腕を突き上げて言う刹那にメンバーも同じように腕を突き上げる。
拠点となりえる建物がある廃村を見つけた刹那達。

救助が来るのはどれ位になるのだろうか……

第三話く別の食糧探し

廃村を見つけ、そこを拠点にする事にした刹那達

アーチャーとジャックが頑張って無事に住める様に直されたのであった。

アーチャー「ホント君達は：私達をメインに頑張らせすぎだろ；」
モリアーティ「黒幕だからね！人使うのは得意だヨ！」

刹那「いやホントお疲れ様、ジャックもね；」

休憩しながらそう言うアーチャーにモリアーティはそう返す隣で刹那はジャックを褒めてなでなでしてあげる。

ジャック「♪」

守理「とにかくこれで休む所はバツチりだね」

マルタ「そうね。助けが来るまで頑張ってサバイバルね」

イリヤ「早く助けが来ると良いんだけど…」

同意するマルタの隣でイリヤが不安そうに呟く。

G O クロ「そうよねー。10年なんて嫌よ」

クロ「まあマシユたちが気づくんじやない？」

アイリ「それで大騒ぎになってなきやあ良いけどね」

ティーチ「ありえそうでごさいますな：拙者らの方のマシユ殿は守理殿に何かあると凄くパニックりますし；」

そうぼやくG O クロにクロはそう言い、アイリのにティーチはそう言う。

刹那「ん〜」

守理「何考えてるの刹那？」

そんな中でジャックを撫で終えてから何か考え込んでる刹那に守理は話しかける。

刹那「いや、ちよつとね〜」

守理「えー、気になるじゃんか〜」

はぐらかす刹那に守理は教えてよ〜と近寄る。

刹那「しようがないなあ。あの船の事故の事を考えてたんだよ」

守理「船の事故？」

そうだよと頷いてから刹那は指を立てる。

刹那「もしかたらあれって仕組まれたことじゃないかなと思って」
アーチャー「ふむ、ありえそうではあるな」

そう言った刹那にアーチャーが近づいて同意するとモリアーティもありえるねと頷く。

モリアーティ「もしかしたら奴らの仕業もしれないねえ」

守理「奴らって…?」

アンデルセン「…あー、魔術関連だな」

首を傾げる守理の隣でアンデルセンが勘づいて言う。

刹那「協会の奴らとか企んでいそうだよねえ」

モリアーティ「確かに刹那君を亡き者にしてその後の成果を自分の物に…な感じがありえそうだね」

ドレイク「たくつ、汚いやり方だねえ…」

腕を組んで言うモリアーティの隣でドレイクは不機嫌そうにぼやく。

ティーチ「あー、ありえそうですな…うちらの方はそんな事したらぶつ潰しそうな面々がいるから早々手を出さないだろうけど」

守理「確かにこつちのメンツはそう言うのをさせない内に目論見を潰しそう；」

イリヤ「あー、確かにそちらはそうしそうですね；」

美遊「でもこちらにはそれがいいから…」

アーチャー「やれやれ、ホント魔術師は良くも悪くも面倒くさいのが多い」

思い浮かべて言うティーチや守理の隣にイリヤも出会った面々を見て空笑いする隣で顔を顰める美遊に一番そう言うのに詳しいアーチャーは肩を竦めて嘆かわしく言う。

刹那「そうだよねー。一回徹底的にボコツところかなー」

守理「あー、それが良いかもね」

アーチャー「確かに釘を刺しておかないと諦めないだろうからな」

モリアーティ「ふむ、我々を怒らせたらどうなるのか一回魔術協会の者達に教えないといけないネエ」

ふふふと黒い笑みを浮かばせてモリアーティは笑う。
ティーチ「うーんホントこの暗躍する中で一番な人」

刹那「おー、いいね教授。流石悪の黒幕!」

モリアーティ「もつと褒めてくれても良いんだよ」

守理「流石子供たちの前じゃあ良いおじいちゃんのもリアーティ
!」

むふんと胸を張るモリアーティに守理は続ける。

刹那「でもレースのは許してないからね」

モリアーティ「ああつと藪蛇が出て来た」

アーチャー「ああ…」

据わった目で言う刹那にモリアーティはうへえとなり、守理側は誰
もが理由を察してティーチがモリアーティの肩をポンと叩く。

ティーチ「良かったでござるな教授殿、こつちの教授殿は刹那殿の
許してないと言う部分なのでXライダー氏から大衆が見てる所でうら
若き乙女に包帯だけにするとは何考えてる!と言う事でプロレス技
を受けましたので」

モリアーティ「そつちの私、死んでないよね?!アラフィフの身体に
プロレス技はキツイヨ!」

イリヤ「確かに死んでませんよね」

出て来た言葉にモリアーティは顔を青くして叫び、イリヤは冷や汗
を掻く。

守理「大丈夫大丈夫。こつちの教授は大丈夫だよ…レースの主犯が
トラウマを植え付けられた以外」

刹那「イシユタル…南無」

手を振って最後に出て来た守理の言葉に刹那は手を合わせる。

アーチャー「神と言えど、度を過ぎればお仕置きされるのは分かっ
ていただけるうに…」

美遊「そうですね…」

イリヤ「地獄みたんだろうね…」

思い出してため息を吐くアーチャーに美遊とイリヤは合掌する。

ティーチ「その点拙者は…明久氏の頓珍漢なコメントのにツツコミ

入れるので疲れたでござる」

ドレイク「頓珍漢なコメント？」

刹那「どんな事言ったの？」

首を傾げる刹那達にティーチは答える。

ティーチ「第二ので、コメントによって加速力を得ると言うので…
ネロ殿とメイドオルタ殿のに対して…」

明久『2人とも…ちゃんと前見て操縦して!!』

ティーチ「違う。確かに合ってるけど、今はそこじゃない…!…って
マジでツツコミを入れたでござる」

刹那「明久くん…;」

イリヤ「明久さんって…天然なのかずれてるのか分からない時ありますね;」

ルビー「ルビーちゃんもマジで驚きですね」

ティーチから出て来たのに誰もが冷や汗を流す。

アンデルセン「まあ、奴は大人のぶつかり合いをプロレスを言う程のずれた男だからな…審査員に向いてないのに出したイシユタル自身も呆気を取られていたからな」

モリアーティ「と言うか何故明久君を審査員に選んだのだ彼女は…」

アーチャー「ウチのマスターは無意識で寝る時あるからきつと戸惑わせる事を言うに違いないと思って選んだそうだ…まあ、大外れだったがな…」

マルタ「と言うかあのメンツで彼を選んだのが普通にね」

刹那「うっかりだよねもう…」

うんうんと話してるとくう…とイリヤのお腹が鳴る。

イリヤ「あ…」

刹那「あはは、安心したから動いたのかな」

アーチャー「ふむ、時間的に考えて夕食を作るとするか」

あははと顔を赤くするイリヤに苦笑する刹那にアーチャーはそう言う。

刹那「今日の晩御飯は何にするの〜?」

モリアーティ「自然に生えていた芋やタマネギなど群生していたからそれも使つて出来そうだね」

聞く刹那にモリアーティがアーチャーが動いてる間に周りを歩いて得た情報を言う。

守理「と言う事はサラダメインになるのかな?」

刹那「んー、早めに魚とか獲らないといけないねこれは」

アーチャー「魚なら任せておきたまえ!」

アンデルセン「貴様のその服はどこから取り出した?」

ティーチ「マジでそこらへん謎でござるな;」

そう言った刹那と守理に何時の間にか釣り師な恰好をしたアーチャーがそう言い、アンデルセンとティーチは呆れる。

モリアーティ「ふむ、罫を仕掛けて動物を捕まえるのもした方がいいかもしれないね」

アイリ「どういふのか住んでるか調べないとね」

イリヤ「猪とかいるかな?」

ティーチ「あー:イノシシは前回の勘弁ですな」

マルタ「確かにイノシシはね:牛がいたら良いんだけどね」

そう言うモリアーティとアイリのにイリヤが呟くとティーチはそう言つて、マルタがそう言う。

刹那「牛...:サーロイン、じゅるり」

ヘブンズ「あらあらく涎がでてますよ」

キアラ「それだけ食べたいのですね」

アンデルセン「貴様らがなるか牛乳女ども」

思い出して涎が出ちゃった刹那にWキアラが笑う中で頭にデカいのを乗せられているアンデルセンはそう言う。

ルビー「おやおや、肉食なんですねマスターさんは」

イリヤ「ちゃんとした意味で言ってるのルビー?;」

ニヤニヤした感じで言うルビーにイリヤは冷や汗掻きながら聞く。ルビー「ほう?ちゃんとした意味と言いますと他にどんな意味があるのか説明できるんですよね?」

イリヤ「え、いや、あの:」

モリアーティ「おじちゃん。最近の小学生の知識広さには驚くなど思うこの頃だよ」

ティーチ「言いたい事は分かるでござる」

刹那「あー確かに；」

ニヤニヤした感じで聞くルビーにイリヤは顔を赤くするのを見ながらモリアーティはそう漏らしてティーチと刹那は同意する。

アイリ「楽しそうね〜」

アーチャー「あなたはつくづく良い感じに見るな…；」

守理「弄られてるよね；」

茨木「なんだか酒呑と同じような目だな」

微笑ましく見るアイリにアーチャーは呆れる中で茨木はそう言う。

刹那「どこがうちやて茨木〜」

茨木「ひっ、酒呑?!」

って貴様!と酒呑の真似をしてから逃げる刹那を茨木は追いかけるのにアーチャーはやれやれと肩を竦める。

ジャック「二回目だね！」

モリアーティ「2回目と言う事は私が来る前に起こったんだね」

そんな追いかけてここにジャックがそう言い、モリアーティは元気だね〜と眩く。

まあ、と言う訳で魚釣りをアーチャーに任せ、ジャックや美遊にG Okroとアイリを留守番係にして他のメンバーは動物を探しに出かけた。

☆

マルタ「反対側は果実の木があったのとは別に凄く草が多い茂ってるわね」

刹那「凄い草だね」

顔を顰めながら道を阻む草を退けるマルタに刹那も避けながら眩く。

イリヤ「うわっ」

キアラ「あらあら、足元注意ですよ」

こけそうになつたイリヤをキアラが支える。

イリヤ「あ、ありがとうございます」

キアラ「見難いですから注意しましょうね」

お礼を言うイリヤにキアラは微笑み返した後に進む。

刹那「んー、これだけなら本当に良い人なんだけどねえ…」

アンデルセン「まあ、そこん所は無知バカやアホのお蔭で抑えられてるからな」

マルタ「明久とゴーグルね；」

モリアーティ「ああ、あの二人か。確かにあの2人に性的な事なんて出来なさそうだね」

その様子を見て言う刹那にアンデルセンはそう返して出て来た単語に当て嵌まる人物にマルタが言つてモリアーティも思い出している。

刹那「あー確かに；」

守理「と言うか普通に明久君とゴーグル君はアンデルセンの言つたので伝わり易いよねホント；」

ルビー「それぐらい分かりやすいんですね。まさに2人の事を言い当ててますし」

苦笑する2人の後にルビーがそう言う…

キアラ「あら？」

イリヤ「ど、どうかしたの？」

どういう事？と思ひながら刹那はキアラが見てる方を見る。

するとそこには…牛と乳牛がのんびりしていた。

マルタ「成程、肉とミルクと言う事ね」

イリヤ「こっちには気づいてないね…」

刹那「どうやって捕まえる？」

キアラの言つた意味に納得するマルタの隣で刹那は聞く。

ティーチ「拙者的に相手を興奮させない様に静かに近づいて草をあげながら優しく接するのが良いと思いますぞ」

モリアーティ「ふむ、それなら二手に分かれてやってみよう。見る

からに数匹いるし、分かれてやった方が効率が良くなるだろう」

刹那「んじやどう分かれる？」

アンデルセン「俺的に鬼と牛乳女ズは待機させた方が良いと思うぞ
…動物は敏感だからな」

そう提案するモリアーティのにアンデルセンがそう言う。

ヘブンズ「あらあらくなんのででしょうか？」

茨木「そうだろうな」

刹那「そうだね」

イリヤ「確かにこの人達が来たら牛は逃げそうですね；」

疑問な2人のに茨木と刹那も同意し、イリヤはそう言う。

ティーチ「ちなみに茨木殿は牛をどう捕獲しますか？」

茨木「餌で釣る」

刹那「餌で釣るか：んじやあ茨木は餌で釣る感じで」

と言う訳でティーチとモリアーティと守理にマルタ組、刹那、ドレイク、イリヤ組と茨木とWキアラとアンデルセンの3組で分かれて牛を懐かせ作戦が始まった。

守理「お互いに頑張ろうね」

刹那「うん」

健闘を祈った後にそれぞれ分かれる。

イリヤ「ゆつくり、ゆつくりと…」

刹那「逃げられたら困るからね」

刺激しない様にゆつくり近づいたイリヤ達はそのままそうと牛へと手を伸ばしてみる。

牛「モー？」

イリヤ「よ、よーしよし」

気づいた牛にイリヤは優しく撫でる。

牛「〜♪」

刹那「あ、喜んでる」

すると牛は嬉しそうにすり寄り、その様子から人に育てられていた奴なのかなと刹那は考える。

イリヤ「わととと」

ルビー「人に慣れてますねこの牛さん」

自分にすり寄る牛にイリヤは少し驚きつつ撫でてあげる。

守理「あ、そっちも上手く行ったんだ」

マルタ「苦労しないで行けたわね」

そこに同じ様に牛を連れた守理達が来る。

刹那「なんか懐かれて…」

ティーチ「けど、これはこれで大助かりですな」

モリアーティ「乳牛の方は良いんだが牛の方が問題だね」

そう言われて誰もがあーとなる。

守理「確かに乳牛からミルクを取るのはいけど…」

刹那「こんなに懐かれた牛を殺すのはちよつと…」

誰もが悩んでいると…

キアラ「あの〜」

するとキアラが呼ぶ声がして誰もが見ると…

イノシシだったもの「チーン

ヘブンズ「肉、ゲットしましたわ」

うふふと笑って肉を持ったWキアラがそう言う。

ただ、その顔が何かで濡れてたり、茨木がアンデルセンの後ろでプルプルしてるが…

刹那「(何したんだこの二人!?)」

モリアーティ「(恐ろしい事をしたのは確かだね!)」

守理「(聞いたたら聞いたらであかんと思う!)」

誰もが顔を青くする中でWキアラは笑みを浮かばせたまま首を傾げる。

☆

アーチャー「顔を青くしてるが何かしたのかね彼女達」

モリアーティ「自分で聞く勇氣があるなら直接聞いたらどうだい？」

沢山の魚が入った見つけたであろうバケツを見ているジャック達

を見守っていたアーチャーは帰って来た刹那達の様子に聞いてから、モリアーティのに遠慮しておこうと返す。

ジャック「沢山捕れたよー！」

GOクロ「ホント、良く取れたわね…そこら辺りのミミズとか手作り釣り竿で」

守理「達人で収まらない程の腕前だよね…クーフリンと王様と組んだら大量に釣り上げるし」

刹那「…クーフリンにとってはいい気分じゃないけど」

目を輝かせて言うジャックを撫でながらも言えない顔をする刹那に守理は首を傾げる。

アーチャー「さて、肉はさっさと焼いて魚も焼いていくぞ」

イリヤ「あ、はい！」

そう言つてを手をパンとさせるアーチャーにイリヤは頷く。

火はアーチャーが起こして手頃な大ききさで綺麗にした鉄網などの上に焼いて行くシンプルな感じであった。

ティーチ「はふ、はふはふ」

守理「シンプルだけに魚とイノシシの美味さがそのまま来るね」

刹那「うん、美味しいね」

茨木「紅茶よ。もつと焼いてゆけ」

アーチャー「急かさなくても今あるのは逃げないから待ちたまえ」
各々に食べながらお腹を満たしていく。

モリアーティ「ふむ、サラダもこれもまた美味だね！」

イリヤ「ホント新鮮で美味しいです！」

肉と魚以外に見つけた野菜で作ったサラダも好評でドンドン入って行く。

守理「あー、食べたね」

刹那「食べた食べた♪」

誰もが満足気に座り、夜空となった空を見上げる。

イリヤ「星がきれい…！」

美遊「何もないからより星が見えるね」

その夜空にイリヤと美遊は目を輝かせる。

守理「色々と見て来たけど、現代の星も良いね」

刹那「そうだねー」

レイシフトした先での様々な星の輝きを思い出しながら言う守理に刹那は同意する。

モリアーティ「どの時代でも星の輝きは変わらないものだネエ」

クロ「確かにそうね：漂流状態じゃなければもっと良かったけど」
マルタ「まあ、確かに」

イリヤ「それを言ったら駄目でしょ；」

そう呟くクロのにマルタは同意する隣でイリヤがそう言う。

アーチャー「とにかく、頑張ろうではないか」

茨木「うむ、そうだな」

刹那「そうだね。来てくれるまで頑張りますか」

守理「うん！」

気合を入れる刹那に守理も頷く。

とにかく初日は無事に過ごした刹那達。

救援は来るのは何時になるか：

第四話く二日目、修復と発見く

食料を確保した刹那達、エミヤの作ったのを食べて初日を過ごした。

2日目

刹那「んー！よく寝たー！」

モリアーティ「おや、おはようマスター」

んーと背伸びする刹那に先に起きていたモリアーティが声をかける。

刹那「あ、教授。おはよう！」

モリアーティ「今日は良い天気のようにだねー！」

ホントだねくと頷くと作業していたアーチャーが声をかける。

アーチャー「刹那か、起きたのならあっちに行ったらどうかね？」

あっちで女性陣が着ていた服を洗濯してるから参加したら良い」

ティーチ「ちなみにしてる理由は建物内から服が見つかったからですぞ。流石に下着は見つかりませんでした」

刹那「そっか。わかった、行ってくる」

そう言うアーチャーと付け加えるティーチのに刹那は頷いて歩く。

守理「あ、刹那も来たんだ」

湖近くでアーチャーの言ってた通り、洗濯しており、守理が刹那へと気づいて近寄る。

近くではマルタがアーチャーが用意したであろう長い棒などで簡易的な物干し台や竿で服などを干していた。

守理は少し腹部分を露出した袖なしのシャツに短パンを履いていた。

刹那「此処で洗濯してたんだ」

イリヤ「はい、綺麗な水だから汚さない様に使った水は海岸に流すんだそうです」

ルビー「ちなみに下着が少なかったから大人の面々は我慢してたりしてます」

マルタ「余計な事を言わないの」

干された服を見て言う刹那に大人のだろうか大きいシャツをワンピースの様に着たイリヤがそう言い、隣にいたルビーへと上はビキニで下は短パンのマルタがチョップを叩き込む。

刹那「へー、そうなんだ。私はどうしようかな」

キアラ「でしたら」

ヘブンス「これはどうでしょうか」

んーと唸る刹那にキアラとヘブンスがすすつとタンクトップと短パンを差し出す。

ちなみに2人はチューブトップと下は布をパレオの様に巻いている。

刹那「お、いいねこれ。ありがと二人とも」

美遊「本当に刹那さん。着れるなら恥ずかしさは置いとく」

GOクロ「確かに」

お礼を言つて2人から服を受け取つてその場で着ていた服を脱いで行く刹那に美遊はそう呟き、GOクロも同意する。

マルタ「……………男の前で着替えないでねホント」

刹那「分かつてるよもう」

そう注意するマルタに流石にしないよと刹那は笑う。

守理「…色々刹那は強いなと思いました」

クロ「なんか刹那、あの事件以来強くなったのよね」

ドレイク「ああ、あの大晦日のね」

それを見て言う守理のにクロとドレイクはそう言う。

キアラ「大晦日と言うと何がありましたっけ？」

ルビー「あ、お二人は知りませんでしたね」

サファイヤ「守理さんたちと初めて出会った時で、そちらだとまだ

第3特異点の時でしたね」

ヘブンス「ああ、それなら私と別の私も知りませんね」

首を傾げるキアラのにステッキ2体が答え、ヘブンスは納得する。

マルタ「その時からなの？」

ジャック「うん、そうだよ。お母さん、あの事件から魔術以外のも自分を鍛えてるんだ」

茨木「あの時からかなり強くなったぞ刹那は」

聞くマルタにジャックは頷き、茨城もそう言う。

守理「そうなんだ…あたしは魔術系のや体力作りの為のトレーニグとかしかしてないから」

イリヤ「そういう所もやっぱり違うんだね。世界ごとに」

そう呟く守理のにイリヤはへえ〜となる。

守理「ほら、あたしの方だと英霊の皆以外に大地さんやガイさんに明久くん達もいるからあたしは主にサポートがメインになるんだ」

刹那「あーそっか。戦う人が多く居るとなかなか強くなれないよね」

ドレイク「強くなれないと言うより各々に役割が出来る感じじゃないかね？」

そんな感じと守理はドレイクのに頷く。

守理「あたしは離れてどういう感じかを知らせる感じでね。時たまガントや令呪を使ってな感じでサポートする感じになるんだよね」

刹那「へーそうなんだ。自分は相手の弱点を見極めて皆に教える役目を果たしてるよ」

ジャック「お母さん、弱点見破るの得意なんだよ！」

マルタ「それは凄いわね。弱点を見破れば有利に立てるものね」
そう言う刹那と自慢げに言うジャックにマルタは感嘆する。

アイリ「あらあら〜そっちは参謀さんなのね〜」

イリヤ「あ、ママ」

そんなメンバーの話し合いに干すのを終えたアイリも加わる。

自分よりもスタイルの良いアイリのにイリヤは本当にスタイル良いなと思った。

アイリ「大丈夫大丈夫。イリヤちゃんも大きくなるわよ〜」

イリヤ「そ、そうかな…」

クロ「あら、イリヤより私が先に大きくなるかもしれないわよ」

GOクロ「確かにお姉ちゃんだもんね」

もー！とからかう2人のクロに守理と刹那は苦笑する。

守理「大きくか…」

刹那「ん？どうしたの？」

ちらつと刹那を見る守理に見られた本人は首を傾げる。

守理「いや…あたし等もあるっちゃああるけど…それに行く人が周りにいてなんとも…」

刹那「守理ちゃん、こういう言葉が世間にはあるんだよ。貧乳はステータス！」

ポンと肩に手を置いて言う刹那に守理もポンと肩に手を置く。

守理「いや、一応あたしら、Cはあるから違うと思うよ刹那；」

マルタ「そうね。それ位あるわよね2人は」

刹那「だから小さいのは小さいながら良いって事だよ。気にしない気にしない」

それに対してツツコミを入れる守理とマルタに刹那はそう返す。

イリヤ「けど羨ましいのは事実だよね」

美遊「そうだね…」

ルビー「大丈夫ですよ〜2人はきつと美人になりますよ〜イリヤさんに至ってはそれを証明する人いますし」

そう言うイリヤのに美遊も同意する中でルビーがそう言うてアイリを指す。

ルビー「もしなりたいたいのならルビーちゃん特製薬で…」

イリヤ「それはやめて!？」

美遊「私も遠慮する…」

うふふと笑って言うルビーにイリヤは叫び、美遊も微妙な顔をして遠慮する。

守理「そんなに碌な事がないみたいだね；」

マルタ「そうね」

刹那「そうだね。んで今日はどうする？」

そう言うて今日の活動について刹那はメンバーに聞く。

守理「んー…やっぱ拠点となる建物の完全修復かな？」

マルタ「そうね。出来てる穴を塞げばもつと住み易くやるでしょうしね」

茨木「ふつ、大工仕事なら吾の出番だな」

イリヤ「え？」

そう答える守理のにマルタも同意してから茨木が言った事にイリヤは思わず声を漏らす。

茨木「酒呑に頼まれて住む小屋を作った技術が役に立つだろう」

クロ「小屋、作ってたんだ」

ルビー「流石は酒呑さんのぱしげフン、信頼されている方ですね」
むふんと胸を張る茨木のにクロは感心する中でルビーがそう言う。

茨木「おい、何か言ったか？」

ルビー「いえいえ何もイッテマセンヨ」

イリヤ「(パシリって言いかけたよねルビー；)」

守理「(普通にパシリって言いかけたね)」

刹那「(危ないところだったね；)」

誤魔化すルビーにイリヤは冷や汗を掻き、守理と刹那はからかう人はからかうなと思った。

☆

アーチャー「着替えて来たか…と刹那、君は本当に羞恥心を忘れてはいけないと思うぞ」

着替え終えたので戻って早々にアーチャーが声をかけてタンクトップ姿の刹那のにそう述べる。

刹那「んーそう？」

イリヤ「まあ、確かにそうですね；」

マルタ「下手に破けたら見えちゃう可能性が高いものね；」

アンデルセン「もう少し教育したらどうだ保護者」

モリアーティ「うちの教育方針は自由だから仕方ないのだよ」

首を傾げる刹那のにイリヤとマルタは冷や汗を掻く中で呆れた感じでアンデルセンがそう言い、モリアーティは肩を竦める。

キアラ「……スタイル良いですし、良い感じに誘惑しそうですね」
ヘブンズ「確かに」

アンデルセン「もしもあ奴らがそつちの方でも召喚されたら変な事

を教えそうだから教育しとけ」

モリアーティ「ああ、そうする」

うふふと笑う2人を見てのアンデルセンの言葉にモリアーティは真顔で頷く。

キアラ「あら酷い」

ヘブンズ「全くです」

アンデルセン「前科あり過ぎなお前等が言っても説得力がないのは当然であろう」

茨木「確かにな」

イリヤ「そうだよね……」

よよよとなる2人にアンデルセンは冷たい目で見て言い、茨木とイリヤも同意する。

マルタ「あんな女性にはなっっちゃ駄目だからねマスター」

守理「う、うん」

刹那「あ、そう言えばそっちのアーチャーに聞きたかったんだけどさ」

アーチャー「なんだね？」

真剣な顔で言うマルタに守理は頷く隣で刹那がそう声をかける。

刹那「エリザベートに処女って言ったのホントなの？」

アーチャー「……………は？」

出て来た言葉が上手く飲み込めなかったのかアーチャーは目を点にする。

その後にくめかみをトントンする。

アーチャー「あー……すまないが普通に覚えがない。と言うかどこの情報筋かな？」

刹那「本人から」

それにアーチャーは空へと仰ぎ、少しして顔を下げる。

アーチャー「すまないが私は月の記憶と言うのはない。と言うか無銘とも名乗った覚えがないので別人だから聞かれても困るのだが……」

刹那「でもキャスターのギルガメッシュに聞いたらアーチャーはその無銘とは平行世界の同一人物だから似たようなことは言うかもし

れないって聞いたけど」

アーチャー「む……………」

そう言われても本当じゃないのだがな…とぼやくアーチャーにアンデルセンが助け舟を出す。

アンデルセン「そこまでにしと刹那。世界が無数にあるのだ。こやつはそう言う俺と牛女と違って本当に月で召喚された無銘と言う男とは別の人物で、無銘の人生とは微妙に違う人生を歩んでると言う事だ。エミヤオルタが良い例だ。こいつがあいつになるなど俺でも想像できない」

刹那「あーうん。ごめんねアーチャー」

アーチャー「理解して貰えれば良いのだが…その無銘と言う私に似た人物はなぜそう言ったか至極殴りたいと思ったよ」

具体例を出されて納得して謝る刹那にアーチャーはそう返す。

ティーチ「それで、拙者達で話してたのですが今日は拠点なる建物の修復をと言う形になったのですがそちらはどうでござりますか？」

守理「あ、丁度良かったね」

イリヤ「私たちは材料運びをしようかと思ってたんです」

話の区切りがついたのでそう言うティーチに守理とイリヤがそう返す。

アーチャー「ならば頼む。それとジャックは屋根の穴塞ぎで使う葉の敷き詰めを手伝ってくれ」

ジャック「はい！」

刹那「それじゃあ今日も頑張つて行くか」

おー！と誰もが気合を入れた後に屋根のをアーチャーとジャックを中心にやり、他のメンバーが壁の補修をする事になった。

アンデルセン「だが俺達は監督だ」

モリアーティ「うむ、指示は任せたまえ！」

ティーチ「うわずる！」

マルタ「ホントこの小説家とアラファイフは…」

GOクロ「困ったものね」

クロ「まあ、ほっておきましょう」

そう言つて椅子に座つて言う見た目は子供小説家とアラフィフの
にティーチはぼやき、マルタとG Oクロはため息を吐いてクロが言
う。

ルビー「では役に立たない私も見学で…」

イリヤ「え？サファイアと協力すれば材料運べるでしょルビー？」

サファイア「と言う事ですので、姉さんもさぼってはいけませんよ」

oh、ジーザス！と叫ぶルビーと共にサファイアはふよふよと飛ん
で行く。

ドレイク「んじやとつととやろうじやないか刹那！」

刹那「うん！」

頷いた後に誰もが作業に移る。

主に壁の釘打ちをマルタとティーチがやり、板を抑えるのを刹那達
がやる。

マルタ「あ、もうちよい下にして」

守理「OK」

ティーチ「イリヤたん、釘を持って来て欲しいでござる」

イリヤ「は、はい！」

ヘブンズ「ほらほらガンバですよ」

ルビー「うくん、重いですな」

サファイア「文句を言わずに運びましょうね」

板を必死に持って飛ぶルビーにサファイアも手伝いながらそう言
う。

アーチャー「ジャック、葉と葉を組み合わせたら紐で軽く縛つて飛
ばされない様に石を屋根が壊れない程度に何個か積んでおいてくれ」
ジャック「分かったよ弓のお母さん」

お母さんではなくお兄さんで呼んでくれと苦笑しながらアー
チャーはジャックと共に屋根の穴を葉や丁度あつた紐を使って塞い
で石で飛ばされない様にしながら自分達が落ちない様に注意しつつ
敷き詰めて行く。

守理「順調だね」

刹那「そうだね。これならすぐできそうだね」

その様子にそう呟く守理に刹那も頷く。

アンデルセン「ホント順調だな」

モリアーティ「そのようだね。ただ何も問題が起きないのが気になるねエ」

のんびりしながら言うアンデルセンのにモリアーティはふうむと顎を摩りながら呟く。

アンデルセン「まあ、前はレイシフトので無人島に飛んだ時はあったそうだが、早々大きいのがあったらきついであろう」

モリアーティ「確かにそうだね。その時より厳しいからない事に越したことはないか」

刹那「あ、材料足りなくなったから探してくるね」

イリヤ「あ、それなら私も」

マルタ「それなら私も手伝うわ」

そう言うアンデルセンにモリアーティは同意した後刹那がそう言い、イリヤとマルタもそう言う。

モリアーティ「気をつけるんだぞマスター」

うん！と返事をしてから刹那達は資材を置いてる場所に向かう。

ホントここは自然豊かだな…と刹那は思いながら歩き…

刹那「……ん？」

イリヤ「どうしました？」

歩いてる途中で周りを見ていた刹那は何かを見つけて声を漏らし、イリヤが聞く。

刹那「ねえ、あれって何かな？」

そう言っ指さした方をマルタは警戒しながら近づく。

近づいてみるとそれは祠であった。

マルタ「これは…祠ね…しかも結構古いわね…」

イリヤ「ん？これって…」

少し触れて呟くマルタの後に近づいて来たイリヤが祠の中を見て何か入ってるのに気づいて戸を開けて中身を取り出す。

それは壊れた石なのだが、表面に何か描かれている。

刹那「何か描いてあるね？」

イリヤ「絵みたいですね…」

よく見ようとするが分ならず、中に複数同じのがあったのでマルタはそれらを掴んでいく。

マルタ「とにかく、これを持って行きましょう。そう言うのが得意な人がいるから丁度良いわね」

刹那「そうだね。あの二人にもちゃんとした仕事ができたね」

だねと頷きながら3人はその石を持って帰る。

守理「お帰りつて、あれ？それどうしたの？」

マルタ「祠を見つけてね。その中であつた奴よ」

刹那「教授ー、これの解析お願いできる？」

モリアーティ「む？解析とな？」

声をかけてから3人が手に持っているのに気づいて聞く守理にマルタが答えた後に刹那はモリアーティを呼んでみて貰う。

渡された石の1つを手にとってふうむとモリアーティはじっくりと見る。

その後別のも見てほう…と声を漏らす。

モリアーティ「これは、どうやら元々一つのものだったようだネ」

刹那「組み立てられる？」

確認する刹那にモリアーティは勿論と返す。

アンデルセン「ふん。なかなか面白そうなのをしようとしてるじゃないか、俺も見てやろう」

刹那「一応パーツはそれだけなんだけど足りないかな？」

心配そうに聞く刹那にそんなもん組み立てれば分かると返された後にアンデルセンとモリアーティは作業に入る。

ルビー「一体、何ができるんでしょうかね？」

刹那「島を脱出できる手がかりになるといいね」

そんな2人の作業を見ながら刹那達は本来やるべき材料取りを思い出して取りに行く。

数分後

アーチャー「よし、修復完了だ」

ジャック「完成ー！」

綺麗になった建物を前にアーチャーはいい仕事したと満足そうに頷き、ジャックも喜ぶ。

マルタ「これで安心して住めるわね」

ドレイク「そっちの方はどうだい？マスター」

刹那「んー、パーツが幾つか足りないみたい」

2人の作業を見ていた刹那に聞くドレイクは返された事にそうなのかいと呟く。

アンデルセン「ああ、祠の中はこれで全部だったのだな？」

イリヤ「う、うん。それぐらいしかなかったです」

モリアーティ「ふうむ…紛失されたか、別の場所にあるのかは分からないが…復元で来た所を見るにこの島には遺跡があるみたいだね」
確認するアンデルセンにイリヤは頷き、モリアーティが髭を摩つてからそう言う。

アイリ「遺跡ってロマンね〜」

刹那「…もしかしてその遺跡にあるのかな？」

守理「え？何が？」

アーチャー「成程、この島を取り巻くAMFの発生源があるかもしれないと言う事か」

呟いた刹那のに守理は首を傾げるがアーチャーが刹那の言いたい事を察して言う。

刹那「うん。そしたらそれを解除すれば此処から脱出出来ると思つて」

モリアーティ「一理あるね。だが、もしも罠があつたら危ないから慎重に考えた方がよいね」

キアラ「確かに下手な罠でも今の私達には厳しいですしね」

GOクロ「そうよね。普段ならともかく今は…」

困ったものね…とGOクロがぼやく。

ティーチ「拙者としてはもう少し情報が欲しい所でありますな」

刹那「もしかしたら村の何処かに情報あるかもしれないね」

守理「んじやあ今日は情報集めに勤しむ感じかな？」

そう提案するティーチに刹那も賛成で守理のにそれだねとモリ

アーティは頷く。

アーチャー「では、何か貴重そうな物を入れてるのがあればそれを見よう」

美遊「では早速探してみましよう」

頷いた後にそれぞれ立て直した建物を調べに入る。

刹那「うわっ、凄い数の本!」

イリヤ「でもほとんどがボロボロ…」

1件の建物に入った刹那はその中に入れられている本を見て感嘆するがイリヤの言う通り、ほとんどが長らく放置されていたせいか風化してボロボロになっている。

試しに1冊を手にとって刹那は中を見る。

刹那「うわっ、虫食いだらけだこれ」

イリヤ「こつちも…」

ほとんどのページに穴が出来てるのに刹那とイリヤはうーんとなる。

ルビー「おや?これは…」

イリヤ「どうしたのルビー?」

刹那「何か見つけた?」

するとルビーが何かを発見したのか声を漏らし、イリヤと刹那はルビーを見る。

ルビー「なーんか嚴重に封印された箱を見つけました」

ほらあそこ…と示された方を見ると確かに鎖や錠前で嚴重にされた箱がある。

刹那「すっごい嚴重だ!」

イリヤ「こ、これは普通に何か大事なのを入れてますよ…と言っての満々ですね;」

それに刹那は叫び、イリヤは冷や汗を流す。

ルビー「ですがどうやって開けますかこれ?」

刹那「教授に開けてもらおう」

それしかないねと言ってから刹那は箱を持って合流に向かう。
守理「えっと、皆、何かあった?」

ティーチ「拙者達はなしでござる」

ドレイク「こつちも成果なしだ」

美遊「こつちもです」

確認する守理にティーチやドレイク、美遊が答える。

アーチャー「一応私とマルタは収穫はあったが最後に回して貰う」

マルタ「他はどう？」

イリヤ「こつちは嚴重に封印された箱を見つけました」

刹那「だから教授に開けてもらいたいんだけど」

一緒に探していたのでそう言うアーチャーの後に聞くマルタにイリヤは箱を見せて、刹那がそう言つて渡す。

渡されたのにモリアーティはふむ…とじつくりと箱の南京錠を見る。

刹那「どう？解錠できそう？」

モリアーティ「これぐらいなら針金があればすぐにでも開けられるよ」

簡単だねと軽く返して取り出した針金でちよちよいと動かす。

カチツ

モリアーティ「ほらネ」

刹那「流石だね教授！」

自信満々に錠前を外し、鎖を取る。

アーチャー「教授、開ける前にひとまず少し離れた場所に移動して、真正面ではなく横から蓋を一気に開けて離れてくれ、もしも何か仕掛けがあった場合を考えてその方が良いだろう」

モリアーティ「うむ、そうだね」

注意するアーチャーにモリアーティも頷いた後に距離を取ってから横から蓋に手をかけて…一気に開けると共に距離を取る。

………シー………

少し時間が経って何も無い事を確認してモリアーティは近づいて中身を見る。

モリアーティ「これは…本の様だね」

箱に仕舞われていたからか見つけた中で綺麗なままの本にモリ

アーティは早速中を見ようと捲って読んで行く。

モリアーティ「ふむ…なるほど」

刹那「何かわかったの教授？」

一通り読んで納得するモリアーティに刹那は聞く。

モリアーティ「どうやらマスター達が見つけた祠以外にも幾つか祠がこの島のあちこちにあるみたいだ」

マルタ「そうなるにあの石絵も分けられて置かれてるって訳ね」

ルビー「ではその祠を探して石絵の欠片を集めれば…」

イリヤ「遺跡へのルートが分かる！」

アーチャー「ならば明日の方針は祠巡りだな」

解明された事にイリヤは喜ぶ中でアーチャーがそう言う。

サファイア「頑張って全ての祠見つけないといけませんね」

美遊「そうだね…全部でいくつ祠はあるんですか？」

モリアーティ「これを見る限り祠は全部で五つみたいだね」

確認する美遊にモリアーティはそう返す。

ティーチ「ちなみに場所に関してはバツチリと言う事ですか」

モリアーティ「うむ。本にバツチリ描いてある」

決まりだねと刹那は手をパンとさせる。

守理「それじゃあ拠点から近い順に探そうか」

刹那「えつと一番近いのは…：此処だね！」

そう言って刹那は指したのは最初に石絵を見つけた祠から少し離れた洞窟と思われる所であった。

クロ「洞窟の中…松明持っていた方がいいわね」

茨木「洞窟ならば何かいてもおかしくないからな嚴重に注意した方がいいだろうな」

アイリ「そうね。色々と準備しないとね」

話は決まったので明日の準備を始める。

また、進む際の並び方も話し始める

アーチャー「先頭に私とティーチにドレイク船長、その間に守理達を入れ、殿を茨木と教授が務めるでどうだろうか？」

モリアーティ「うむ、その方が良いと私も思う」

提案するアーチャーにモリアーティは賛成する。

守理「ドキドキするね」

イリヤ「そ、そうですね…」

刹那「何か出てきそうだよね」

出て来そうという言葉にはひいと守理と刹那は抱き締め合う。

茨木「なんだ、怖いのか二人とも」

クロ「そう言う茨木は足が震えてるわよ」

笑って言う茨木に対してクロが指摘する。

茨木「こ、これしきの事、怖がるものか。これは武者震いだ！」

刹那「ほんまかいな茨木く」

そう返す茨木に刹那は声色を変えて耳元で言う。

茨木「三度も騙されぬぞ！」

刹那「あら残念」

ふがー！と怒鳴る茨木に刹那は笑う。

アーチャー「では気を引き締めて明日に備えて寝る様に」

イリヤ&美遊「はい！」

元氣よく返事した後それぞれは明日に備えて睡眠に入る。

こうして2日目のも過ぎしたのであった。

第五話く探索と思い出した事く

前回、島を脱出する為の情報を手に入れた刹那達
一行は1つ目の場所に向かっていた。

刹那「えーつと、たしかここら辺だったよね？」

モリアーティ「うむ、間違いないよ」

最初の目的地である洞窟があると思われる場所を確認する刹那に
モリアーティは頷く。

守理「そう言えば…アーチャーとマルタは何を見つけたの？昨日最
後に言うって言ってたじゃん」

アーチャー「ああ、すまないね」

マルタ「こつちはどうしてAMFがあるのか、とか、どうして無人
島になってしまったかの奴ね」

イリヤ「何か分かったんですか？」

思い出して言う守理にアーチャーは忘れてたと謝罪し、続いたマル
タのにイリヤは聞く。

マルタ「丁重に保管された日記を見つけたの…記された内容による
と…まず、この島の自然は一部は魔術師により手を加えられていたみ
たい。どうしてそうしたかは住まわせる住人達と共にのどかに暮ら
す為みたい」

アーチャー「それでAMFは外から来た同じ者が侵略をしようとし
て来た際に魔術を使わせない様に遺跡を作り上げ、そこに魔力などを
使うのを無効化するのを設置したらしい。ところが、その設置した所
に魔力が集中し、迷い込んだ動物に溜まりに溜まった魔力が流れ込ん
でしまつて強力な魔物が誕生してしまい、なんとか物理的に封じ込め
たのは良いが、その魔物がもしも暴れたらと言う恐怖心から住民と共
に島を出て行ったそうだ」

ティーチ「うわー…それ普通にヤバいですな…」

ドレイク「って事はこの島の何処かにその魔物が居るって事かい
？」

刹那「そうなるね…」

2人の口から告げられた情報にティーチは嫌そうに言い、ドレイクのに刹那は頷く。

守理「それじゃあ早く見つけないとね…」

アイリ「確かに動き出したら危ないわ」

イリヤ「今の状態じゃまともに戦えないからね…」

うーんと唸るイリヤにそうだねと守理は頷いてから…首を傾げる。

守理「(あれ、なんで引かなかったんだろう…?)」

アーチャー「む、あれが目的の洞窟だろうか」

んんん？と首を傾げてる守理だったがアーチャーの言葉に彼の見ている方へと顔を向ける。

確かに切り立った崖の下に人が入れる洞窟と思われる穴がある。

クロ「随分と深そうね」

刹那「松明用意する？」

した方が良さだろうとアーチャーは松明を点け始める。

先頭はティーチとアーチャーが持ち、真ん中に守理と刹那、最後尾にモリアーティと茨木がそれぞれ持つ。

茨木「では行くとするか」

刹那「うん」

警戒しながら一同は洞窟へと足を踏み入れた。

ぴちよん、ぴちよん…

アイリ「少しひんやりしてるわね」

美遊「それに水滴の音もする」

響く水滴の音にイリヤは思わずビクツツとして自身の体を抱き締める。

外は熱かったのもあって、洞窟の中はひんやりしていた。

マルタ「今の所大丈夫ね…」

刹那「でも油断しないように気をつけないと」

呟いたマルタは刹那のにそうねと気を引き締める。

ドレイク「それにしてもなんか財宝とか隠されていそうな洞窟だねえ。ワクワクするよ」

GOクロ「流石にないんじゃないの？」

ティーチ「いや、あながち結界を作った本人の財産が残ってる可能性がありえるかもしれませぬぞ」

ジャック「お宝があるの!？」

刹那「まあもし余裕があったら探してみようか」

ウキウキしながら言うドレイクにGOクロが呆れて言うがティーチが割り込んで言い、目を輝かせるジャックに刹那は苦笑して言う。

茨木「ほう、財宝か…。それは土産に良いかもしれないな」

モリアーティ「確かに驚かせるべきな意味でも良いかもしれないね」

アーチャー「君達、脱出するのがメインだからな；」

ルビー「そうですね。お宝は脱出できるようになってから探しましょう!」

イリヤ「いや、ルビーもある前提で乗っからないで；」

くくくと笑う茨木とモリアーティにアーチャーはそう言い、ルビーのにイリヤがツツコミを入れる。

守理「あはは；」

刹那「あれ？なんか見えない？」

それに守理が苦笑する中で刹那が前を指して言う。

アーチャーが松明を掲げて見ると確かに何かの物体らしき物が確認出来る。

恐る恐る近づいて行くと祠が見えた。

マルタ「見つかったわね。とにかく複雑じゃなくて良かったわ」

刹那「んじや調べてみようか」

罫がない事をアーチャーとモリアーティが確認した後扉を開ける。

中には刹那達が見つけたのと同じのがあった。

サファイア「ありましたね」

美遊「だね。最初に集めたのと組み合わせて見ますか？」

刹那「そうしようか」

そう言って大事に仕舞っていた石を取り出して新しいのを組み立てて行く。

それにより、石板に近い感じになって絵らしくなったがそれ以外はない。

アーチャー「…やはり全てを集めなければ無理そうだなこれは」
アンデルセン「まあ、分かっていた事だ。残りの場所も行かんとな」
刹那「それじゃ洞窟出ようか」

ドレイク「だね。さっさと出るとするかい」

その言葉の後にメンバーは洞窟の出口へと向かう。

イリヤ「何もなく取れてよかったね」

ルビー「ですね、この調子で行きたいですね」

ホッと安堵するイリヤに軽い調子でルビーはそう会話しながら進む。

ジャック「…お母さん、何かいるよ?」

刹那「え?」

ある程度進んだ時、ジャックがそう警告し、誰もが警戒する。

アーチャー「どうやら安心は出来ないみたいだな」

クロ「そうみたいね……!」

GOクロ「一体何が来るのかしら…」

アイリ「ルビーちゃん。何か分かる?」

ルビー「ん、ちよつと待ってくださいね…」

言われてルビーはルビーちゃんアイと言いながら前を見て調べる。
少ししてから…

ルビー「あーちよつとヤバいのがいますね」

イリヤ「ヤバいの!」

告げられた事にイリヤは叫ぶ。

そんなイリヤに誰もがシーとしてイリヤは慌てて口を抑える。

動物ならば下手に大きい音を立てて刺激したら危ないからである。

アーチャー「姿はどんな感じかね?」

ルビー「ふーむ、これは狼に近い感じですね」

刹那「狼に近い感じか…そうなると危ないね」

アンデルセン「確かに下手に臭いを覚えられたら追いかけてきそうだからな」

確認するアーチャーのに答えたルビーのに刹那はそう言い、アンデルセンも同意する。

モリアーティ「ふむ、匂い消しになるものでもあれば良かったのだが…」

イリヤ「い、今ないですね；」

守理「ホントにどう言うのかも確認しないとね…」

困った様に呟くモリアーティにイリヤは顔を青くし、守理もビクビクしながらそう言う。

誰もが警戒しながら恐る恐る進んで行く…

狼？「グオオオオオオ…」

普通のより大きい狼がいた。

マルタ「これはまた…」

刹那「かなり大きいね…」

モリアーティ「しかも厄介な事に道を塞いでと言うね；」

うわあ…と漏らす2人の後にモリアーティは困った様に狼？の後ろを見て呟く。

ジャック「どうしようお母さん…」

イリヤ「ジャックの言う通りどうします刹那さん」

ルビー「普通に我々は戦う術が今封じられてますからね…」

ううーんとみられて刹那は唸る中で…

守理「あー…！あつた！普通にあつた!!!」

アーチャー「守理、シー！」

突如守理が声をあげて、アーチャーのに慌てて口を塞ぐ。

刹那「なにやってるの守理!？」 小声

守理「いや、ごめん。だけど万が一の防衛術をティーチが持つてるの；」

小声で話しかける刹那に守理も同じように返す。

ティーチ「あ、あー…：そうか、アレでござりまするな…：そうでした。アレは魔術と全然関係なしでござりました」

ドレイク「なんだい？そのアレってのは」

言われてティーチも声を出すのにドレイクは首を傾げる。

これこれ…と懐からゲーマドライブとガシヤットを見せる。

アーチャー「あー、それか…」

イリヤ「それ、あつたんですね…」

ルビー「あつたならなんでもっと早く言わなかったんですか？」

ティーチ「色々とてんわやんわだったので持つて来てたの忘れてたでござる…変身！」

バンバンシューティング！

ガシヤット！

ガシヤーン！

レベルアップ！

バンババン！バンババン！バンバンシューティング！！

確かにあつたなど顔を抑えるアーチャーの後にイリヤとルビーの
にティーチは答えた後にスナイプレベル2に変身する。

G Oクロ「これならいけるかしら…」

美遊「お願いしますティーチさん…！」

スナイプ「任されたでござりますぞ」

ガシヤコンマグナム！

変身したのに驚いていたがすぐさまそう言うG Oクロと美遊の
スナイプはそう返した後にガシヤコンマグナムを掴む。

スナイプ「ミツシヨン、スタートですぞ！」

駆け出した後に気づいた狼？にまずは様子見と牽制で狼の足元を
攻撃する。

狼？「ガウツ！」

放たれたのに狼？はすぐさま飛び退ると警戒する様に唸る。

スナイプ「賢さはある様ですな」

モリアーティ「そのようだね」

アーチャー「ふむ、物は試しだ」

その反応から呟くスナイプとモリアーティの後にアーチャーは
持っていたのから大きな肉を取り出すと狼？に向けて放り投げる。

投げられたのに狼？は少し警戒の素振りを見せてから啞えると洞
窟の入り口へと駆け出して行く。

守理「行つたね…」

マルタ「もしかすると、食べる物を探してたのかしらね」

刹那「だから肉をあげたら去つたのか…」

イリヤ「良かったー」

ホツと安堵するイリヤだがヘブンズが注意する。

ヘブンズ「ですが、あの狼の魔物さん。なぜ私達が見つけた牛を狙わなかったのでしょうか？」

キアラ「そう言えばそうですね」

ドレイク「確かにおかしいね…」

ジャック「何か理由でもあるのかな？」

2人のドレイクとジャックが言うアンデルセンが推測を立てる。

アンデルセン「…案外あの牛を襲うのが難しかったか…はたまた人の住む場所の近くに住んでいたからのどっちかだろう」

アイリ「後者の場合は…縄張りの範囲外だったから？」

刹那「もしそうだったら運が良かったよねあの牛」

んーと指をあてて言うアイリのに刹那はそう述べる。

スナイプ「ともかくにも、早く次の所に行くのが最適ですな」

ドレイク「それもそうだね。次の欠片は何処にあるんだい？」

モリアーティ「待ちたまえ…えつと…」

そうやって次の場所の地図と照らし合わせてモリアーティは言う。

モリアーティ「次はこの崖の近くのようだね」

刹那「崖の近くって…崩れてないかな？」

出てきた場所のにそう呟く刹那にそこまでは分からないよとモリアーティは肩を竦める。

守理「まあ、その時はティーチに見て貰えば良いだけだしね」

スナイプ「いやそりゃあ飛べるでござりますがね…」

刹那「取りあえず行ってみないとね」

イリヤ「そうですね」

そう会話をしてから全員洞窟の外に出る。

マルタ「少ししかいなかったけど、それだけでも太陽のが眩しいわね」

美遊「眩しい……！」

見えて来た日差しに目を細めるマルタに美遊も手で太陽の光りから目を守る。

慣れて来てから移動を開始する。

ドレイク「この崖に行くにはこの道を通らないといけないみたいだねえ」

GOクロ「道って言うのかしらこれ……」

崖への道について眩くドレイクのにGOクロは呆れた感じに言う。

メンバーの目の前に……メンバーの身長もよりも凄く高い草が生えていた。

スナイプ「伸びすぎですな」

刹那「凄い成長してるね……」

誰もがうわお……となる中でこれははぐれない様にしないと……とアーチャーは呻く。

守理「これははぐれたらやばいね；」

美遊「はぐれないように気をつけないと……」

クロ「この蔦で身体の身動きが取れなくなったらきついわね」

冷や汗を流す守理と美遊の後のクロのに誰もが頷く。

アーチャー「それで今の状況と関係ないがクロエ……あー、カルデアの方に出た方の」

GOクロ「私？」

入る前にと呼び止めてからアーチャーからのGOクロは首を傾げる。

アーチャー「いやなに、ここまでの間、クロやクロエと呼ぶと2人とも反応するのでな……君の方はノワールと呼ばせて貰っても良いだろうか？」

スナイプ「ああ、確かにややこしいですもんな」

刹那「でもなんでノワール？」

イリヤ「確かにそうですね。どうしてですか？」

そう提案するアーチャーのにスナイプも納得する隣で刹那とイリヤが聞く。

アーチャー「いやなに、意味が黒の外国語で一番女の子らしい名前が良いかなと思ったのだが…駄目だろうか？」

G Oクロ「ノワールね……まあ良いんじゃないの？」

クロ「まあ、確かにいちいち名前の前に付けられるのもなんとも言えなかったから良いと思うわよ」

モリアーティ「よし、呼び方のも片付いたから目の前に戻そうか」
そう言うG Oクロ改めノワールとクロの後にモリアーティがそう言う。

ジャック「この草、切る？」

マルタ「その方が良いでしょうね。このままだとはぐれるのは確かだわ」

刹那「んじや道具を用意しないとね」

聞くジャックにマルタはそう返し、刹那も同意して言う。

アーチャー「やはり鉈が必要だな」

モリアーティ「鎌の方が良いのではいかな？」

守理「いや、それはそれで振り回してスポツと手から抜けたら危ないと思うよ教授；」

刹那「いやいや、守理。それはおかしいから」

マルタ「守理、貴女が言ってるのは大鎌でしょう…普通の手に持てるサイズの鎌だと思うわよ」

そう言うモリアーティのに言った守理に対して刹那がツツコミを入れて、マルタが指摘する。

守理「あ、ごめん。デュオ君とかが大きいの使ってたからつい；」

イリヤ「あんなに大きいのは使いづらいよ；」

謝る守理の言い分にイリヤはそう返す。

スナイプ「うーむ、アーラシユ殿がいたら簡単に出来てただろうけどいらないから鎌を取りに行かないといけませんな」

アンデルセン「それしかあるまい」

ドレイク「んじや一回道具取りに戻るしかないね」

それしかないなと考えて誰もが元来た道に戻る。

ノワール「(それにしてもノワール…か…まあ、もう1人の私とはつきり別人と分かる感じで…) 良いかもね」

刹那「ん? どうしたの?」

ボソリと呟いたノワールのに刹那は振り返って聞き、なんでもないと返されてまた前を向く。

新たに石を見つけた刹那達。

長い草の生えた場所の先にある崖の状態は…

第六話く巨大狼く

1つ目の場所で新たな石を見つけ、2つ目の祠がある長い草の生えた場所の先にある崖へと向かう為、鎌を取りに村に戻った。

アーチャー「さて、確か鎌は…」

ジャック「えっと、鎌鎌…あ、あつた！」

道具を置いてる小屋で目的の物を探してジャックが真つ先に見つける。

その後ジャックが見つけたのを含めて4つ見つかる。

マルタ「んー、少なくともなく、多くもなくかしら？」

モリアーティ「だがどれも錆びているな」

刹那「研げば使えるかな？」

アンデルセン「そうなるそれが取れるまで待機になるな」

並べられたのを見て言うマルタとモリアーティと刹那の後にアンデルセンが時間を考えて言う。

ノワール「ねえ、こんなのを見つけたんだけど」

クロ「これで草を刈れないかしら？」

するとノワールとクロがある物を差し出す。

それは黒い石でアーチャーは手に取る。

アーチャー「これは…黒曜石か…確かに刈ると言う意味では鎌替わりには使えるな」

イリヤ「黒曜石って確か昔の人が武器に使っていた石ですよね？」

茨木「む、確かに武器にも使われていたが、動物の肉を切ったりなどの日用品でもあるぞ」

見て言うアーチャーのに聞いたイリヤへと茨木が答える。

アンデルセン「その鬼の言う通り、昔の人間にとつては様々な事に使われていた今で言うカッターや鋏代わりに使われていたから十分鎌の代用品としても使えるな」

刹那「二人とも良いのを見つけてくれてありがとう！」

そう言って褒める刹那にクロとノワールは照れる。

マルタ「これで一応刈れる様にはなったわね」

ルビー「そうですね！」

サファイヤ「では早速草刈りに行きましょうか」

誰もが領いて早速第2の祠への道を阻む長い草の所まで戻る。

早速アーチャーが1部を掴んで黒曜石を滑らせると草は刈られる。

アーチャー「流石昔の日常道具だ」

美遊「良い切れ味ですね…！」

刹那「よし、どんどん刈るよー！」

おー！と刹那のにジャツクは意気揚々と刈り始める。

守理「それにしても…なんだか稲を刈る農家さんの気分だね」

イリヤ「あー確かに似ているかもしれない…」

ドレイク「しかしこうやって屈んでやるのは腰が疲れるね」

スナイプ「ちよつとババア。守理殿達より大人なんだから先に疲れるのはあかんと思いますぞ」

草を刈りながらそう述べる守理にイリヤも同意する中で腰をトントンするドレイクにスナイプが言う。

ドレイク「普段やらないことをやるんだから疲れが出ちまうのは仕方ないだろ。それにあんた変身してるから普通より疲れ難いだろ」

刹那「まあまあ二人とも。喧嘩は止めようよ」

守理「そうだよ。ティーチもね。まあ、変身してるのは警戒してだからありがたいけどね」

ぶーたれるドレイクを刹那は宥め、守理がそう言う。

アンデルセン「そうだぞ。手を動かせ、手を」

モリアーティ「あともう少しだ。頑張りたまえ」

ノワール「それを言うならあんたらでしょうが！」

そんな少し離れた所で茶々を入れる2人にノワールは叫ぶ。

アーチャー「あの2人はホントな…」

マルタ「…：ねえ教授にアンデルセン、後で運動してぎっくり腰になる可能性を持ってやるか、それとも…：今ここで寝転がってるのどっちが良い？#」

スナイプ「お、落ち着くでござるマルタ氏！」

刹那「此処で怪我人出すのはマズいって！」

モリアーティ「はい、手伝います！」

ヘブンズ「それじゃあアンデルセンは…」

キアラ「私達が…」

アンデルセン「ようし、きびきび行くぞ！」

ポキ、パキと音を鳴らすマルタにスナイプと守理が宥めに入り、流石にやばいと感じてモリアーティはすぐさま行動に移り、詰め寄る痴女2人にアンデルセンも刈り始める。

アーチャー「やれやれだな」

クロ「全く、何をやってるのかしら…」

それにアーチャーとクロは呆れながら草を刈る。

しばらく草を刈りながら進んでいると開けた場所に出る。

守理「着いたの？」

アンデルセン「いや、進んだ距離と時間から考えて、まだ中間位だろう」

刹那「なんか開けた場所だね」

イリヤ「何でここだけ開けてあるんだろ…」

スナイプ「あ、なんか嫌な予感がする…」

聞く守理にアンデルセンはそう返し、刹那とイリヤも首を傾げる中でスナイプがガシヤコンマグナムを構えた時…

???「がああああああああああ!!!」

すると咆哮と共に何かが現れる。

それは二足歩行となった狼で、その手の爪が鋭く伸びていた。

スナイプ「予感的中…」

守理「う、うわーお…」

ルビー「ほとんどウェアウルフですねこれは」

刹那「こ、ここが広がったのはあの爪で刈り取ったからで…つまりここはあの狼の縄張りと言う事；」

威嚇する様にグルルと唸る二足歩行狼もといウェアウルフにスナイプが前に出る。

スナイプ「ホント、骨が折れますなこれ…」

ドレイク「全くだねえ…」

美遊「しかもマトモに戦えるのはティーチさんだけ…」

ぼやくスナイプにドレイクも同意する中で美遊が不安そうに呟く。

スナイプ「大丈夫ですぞ美遊たん。拙者はそう簡単に…あぶなっ！」

言ってる途中で振り下ろされたのにスナイプは慌てて避けると…
振り下ろされた拳が地面を陥没させる。

守理「…：爪以外にも腕つぶしつよ!？」

刹那「え、なに。もしかしてこの島の主とか？」

それに驚いている間にスナイプは銃撃するがウエアウルフは爪で防ぎながら接近して爪を振るう。

スナイプ「おっと、わっと!？」

ジャック「強い…!」

クロ「これはちよつとマズいわね…!」

避けるスナイプを見ながらクロは焦った声で言う。

アーチャー「いや…：どうやら相手はそこまで早く動けないかもしれない」

アンデルセン「確かにな…：立ち回り方から見てもそれを見せない様にしてるな」

ノワール「じゃあスピードで勝負すればまだ大丈夫なのね」

刹那「スピード…：出せる?」

それにアーチャーとアンデルセンが冷静に分析し、ノワールの言葉に刹那は守理に聞く。

守理「…：うん、スピード戦法得意なのはアーラッシュでティーチはトリッキーな方が得意だから…」

スナイプ「し、心配ご無用ですぞ!」

バンバンシミュレーション!!

そう言って距離とを取ったスナイプはガシャットギアデュアルベータを取り出してバンバンシミュレーションの報に回すとシミュレーションゲームを召喚する。

そのままレベルアップするのかと守理達は思ったが…

スナイプ「てえっ!!」

ドドーンドドーン！

指示と共にシミュレーションゲームはウエアウルフを上空から砲撃する。

守理「合体に使用せずの支援砲撃!？」

刹那「これなら相手は避けるのに集中しなければならなくなる!」
イリヤ「これなら!」

誰もが思う中でウエアウルフは爪で弾いて行こうとするが段々と爪にひび割れが起き:

パキーン!!

ウエアウルフ「!？」

爪が碎け散る。

刹那「爪が碎けた!」

モリアーティ「今がチャンスだ!」

スナイプ「了解ですぞ!」

ズ・キューン!

ガシューン:

ガシャット!

キメワザ!

好機を見逃さず、スナイプはライフルモードにしたガシャコンマガナムにガシャットを差し込む。

バンバン!クリティカルフィニッシュ!!

スナイプ「食らうでござる!スナイプ・シュート!!」

ウエアウルフへと強力なエネルギー弾を発射する。

避けようとしたウエアウルフだがシミュレーションゲームの援護射撃で動けなくされ:

ドカーン!!

会心の一発!!

炸裂して、爆風が収まった後には倒れ伏したウエアウルフの姿があった。

スナイプ「んんwwww決まるとホント良いもんですぞwww」

マルタ「ホントあんだ、その決まった時の論者だっけ?セリフは抑

えた方が良いんじゃない？」

イリヤ「た、確かに…」

刹那「ホントテイーチがスナイプって口調だけを見ると違和感あるね；」

気分よく言うスナイプにマルタはツツコミ、イリヤと刹那も同意する。

スナイプ「別にいいではないでござるか！拙者は基本的に言えばギャグ方向なのに色々濃いやつがいるからツツコミになっちゃってますけど！こういう時位出させて貰っても宜しいっしょ！」

アーチャー「濃い面子と言うのは分かるがね…」

ノワール「確かにそうよね…」

モリアーティ「いやー誰の事だろうね」

守理「教授も含まれてると思うからね；」

熱く語るスナイプにアーチャーとノワールは肩を竦め、すつとぼけるモリアーティに守理は指摘する。

キアラ「それで、これで無事に進めますわね」

ルビー「そうですね！このまま祠まで行きましょう！」

サファイア「では草刈りの続きといきましょうか」

そうだなと方向を再確認してから進行を再開する。

アイリ「それにしても、魔力で変貌したと言うのはアーチャーとマルタさんの調べで分かっていたけど他の動物も変貌してるのがあるがね…」

刹那「他にはどんなのが変貌しているんだろうね」

困った感じに呟くアイリのに刹那もうーんと腕を組む。

アンデルセン「ま、言える事は一つ。先の事を考えるよりはまずは目の前の事を済ませるのが一番であろう」

クロ「それもそうね。とつと草を刈り取りましょ」

イリヤ「そうだね」

その後一同は草を刈り続けて進むと崖の様な所に出る。

マルタ「ここが目的地かしら」

モリアーティ「ふむ、あそこに祠があるからそのようだね」

周りを見て言うマルタにモリアーティは崖の一番先を指す。

確かにそこには祠があった。

守理「よし、ティーチGO」

スナイプ「うん、なんとなく知ってた」

刹那「早速開けてみようか」

近寄って罫がないかをスナイプが確認し、刹那達が祠から長い草の所まで退避したのも確認して祠の扉を横から一気に開ける。

少し間を置いて何も起こらない事のでスナイプは中を見ると地図を示す石が置かれていて、それを手に取ってすぐさま刹那達の元に行く。

スナイプ「ああホント緊張しますな」

茨木「罫がなくてよかったな」

ノワール「これで二つ目かしらね」

アーチャー「後4つ、まだまだ先ではあるが前進はしてるな」

首を動かすスナイプに声をかける茨木の隣で呟いたノワールのにアーチャーは肩を揉む。

刹那「このまま欠片を全部集めちゃおうか」

イリヤ「この近くに他の祠はありますか？」

ちよつと待ちたまえとモリアーティは地図を確認する。

モリアーティ「ふむ…どうやらこの近くにはもう祠はないらしい」

ルビー「んーそうになると流石に遠出してしまったら暗くなってしまうのではないでしょうか？流石に危険ですので今日は切り上げて、明日にするのをルビーちゃんは進言しますね」

そう言ったモリアーティにルビーがそう提案する。

美遊「確かにもうすぐ夕方になりそう」

刹那「ルビーの言う通り、暗くなったら危ないから早く拠点に戻ろう」

提案を了承し、一同は拠点に戻る事にした。

拠点に戻ると辺りは暗くなっていて、アーチャーは早速火をつけて明るくする。

アンデルセン「残りは4つ、このペースだと良くて1日に1ヶ所に

なりかねんな…」

刹那「んく分かれて回収するのは出来ないかな？」

そう呟いたアンデルセンのに刹那がそう提案する。

守理「分かれてか…」

マルタ「確かにそれが最善の手だけど…」

モリアーティ「ふむ、それは普段であれば賛成だが、今の我々では
厳しいから賛成は出来ないね…」

難しい顔でモリアーティはそう言う。

確かに戦えると言う意味ではティーチしかおらず、しかももしも遭
遇した場合を考えると普通に危険が高い。

ドレイク「ああ、ホント、厄介だね…」

刹那「せめてもう一つ変身アイテムがあつたら良かったね」

ティーチ「残念ながら拙者はスナイプのしかないの…」

ん…と誰もが唸っている中…アーチャーがある方へと
顔を向ける。

守理「?どうしたの?」

アーチャー「しっ…何か音がした」

クロ「音…?」

茨木「もしかして獣か…」

誰もが警戒する中で段々と音がしていき…

???「ぶへえ…やつと知ってる奴らと再会出来た…何十時間も泳いだ
ぜ…」

そう言つて焚火により照らされた姿は仮面ライダーだった。

顔付きがケモノっぽく、瞳が入ったマスクに腰に付けてるバグルド
ライダーからエグゼイド系ライダーっぽい。

刹那達は見た事もないので誰?と思つた後に仮面ライダーはガ
シャットを抜いて変身を解く。

ガシューン…

現れたのは…アンリマユであった。

アンリマユ「いやー、やつと見つけたぜ守理にアーチャー、マルタ
の姐さんにアイリスフィール、後ちびっこおっさんと痴女2人さん」

守理「アンリマユ!」

アーチャー「ヴィランに変身してるからもしやと思ったが…やはりお前だったか…」

刹那「アンリマユ!」

イリヤ「なんで此処に!?!」

笑って近寄るアンリマユに誰もが驚く中でイリヤが代表で聞く。

アンリマユ「そりゃあ俺も乗ってたのよ…ちよいと内緒で☆」

アーチャー「つまり…こちらに付いて来ていたと言う事か…」

ティーチ「抜け目ないでござるな…」

刹那「よくあの事故に巻き込まれて無事だったね…」

ノワール「と言うかさつき何十時間もって言ってたから事故から泳ぎ続けてたって事よね」

笑顔で言うアンリマユに誰もが呆れる。

アーチャー「だが都合だ…アンリマユ、君のゲームドライバーを貸してくれ、バグルドライバーがあるから別に貸して貰ってもいいだろう」

アンリマユ「ん?ゲームドライバーはバグルドライバーが故障した時の代用品だから別に貸しても良いけど」

ティーチ「ああ、そういう事ですな」

イリヤ「え?どういう事?」

刹那「あ、なるほど。これで三人が変身できるようになったのか」
そう言っただけでゲームドライバーをアーチャーに投げ渡すアンリマユとの会話にイリヤは分からなかったが刹那の言葉にあ、成程!と納得する。

アーチャー「ティーチ、君のガシャットギアデユアルベータを貸してくれ。そうすればスナイプかブレイブになれる」

ティーチ「あ、確かにそうですね」

モリアーティ「これで三チームに分けられるようになったか」

ノワール「明日からは三倍のスピードで欠片を集めれそうね」

クロ「それじゃあ一つを残して3つ同時進行って訳ね。組み合わせはどうする?」

ガシヤットギアデュアルを借りてるのを見ながらクロは聞く。

モリアーティ「ふむ、バランスよく組み合わせるとしたらこういう感じでどうだろうか…」

そう言つてモリアーティは地面にその組み合わせを書く。

ロリとお兄ちゃんチーム：イリヤ、美遊、クロ、ノワール、ジャック、アーチャー

悪チーム：アンリマユ、茨木、モリアーティ、ヘブンス、キアラ、ア
ンデルセン

黒ひげと主人公チーム：ティーチ、守理、刹那、マルタ、アイリ、ド
レイク

刹那「あー確かにその方が良いね」

アーチャー「すまない教授、私の所が微妙に字面を見ると何とも言えない感じになるのだが…そこは女子と保護者チームではないだろうか」

イリヤ「ロリつてなに!？」

ノワール「でも間違つてはないわよねお兄ちゃん♪」

納得する刹那の指で指摘するアーチャーにノワールは抱き着く。

ティーチ「イリヤさんがアーチャー殿なのは納得、拙者だったら絶対にチーム名のお兄ちゃんの所が犯罪者ですね。分かります畜生」

守理「ホント良かったねティーチ、Xライダーさんがいなくて」

クロ「居たらまたお仕置きされてたわね」

そう言つたティーチは守理とクロのマジで止めてください、死んでしまいますと顔を青ざめる。

マルタ「まあ、これでいけるわね。残つた1つは合流して余裕があれば行く感じで良いかしら？」

アンリマユ「話分かんねえけど、その1つ? つか所が3チームのどれかの目的地に近いならそのチームが取りに行つた方が良いんじゃないの?」

モリアーティ「いや、それではもしもの時、そのチームでは難しい状態だったらやばいからね…」

確認するアンリマユにモリアーティは腕を組んで反対する。

確かに強力な魔物がいたらたどえ仮面ライダーでも1人では厳しいと思うと刹那は同意する。

刹那「あ、そっか。じゃあ合流してから行った方が良いね」

モリアーティ「ああ、多少非効率だがその方が安心できる」

守理「それじゃあ明日はそんな感じで行こうか」

マルタ「そうね。気を付けて行きなさいよ。特にアーチャー」

アーチャー「ああ、肝に銘じておくよホントに」

決まった後にそう言うマルタにアーチャーは心底頷く。

美遊「アーチャーさん、明日はお願いします」

ジャック「お願いするねアーチャーさん」

ああ、任されたよとアーチャーが頷くとアンデルセンが肩を揉む。

アンデルセン「ならば地図の複製をせんとな…やれやれ、描くのに骨が折れるな」

刹那「私も手伝うよアンデルセン」

ルビー「ガンバですよ」

肩を回すアンデルセンに刹那が手伝いを申し出る。

応援するルビーにもルビーはとイリヤはため息を吐く。

モリアーティ「マスターが手伝うのならば私も手伝おう」

イリヤ「えっと、私達は…」

マルタ「明日に備えて英気を養いましょうか」

それにモリアーティも手伝いを申し出て、どうしようかと悩むイリヤにマルタはそう言う。

こうして2つ目ので新たにを見つけ、次は分かれて目指す。

第七話く巨大土竜く

アンリマユが来た事で別れて探す事になった刹那達。
此処はアーチャー達を見てみよう。

アーチャー「と言う訳で皆、これから注意して探しに行くから気を付ける様に」

ジャック&イリヤ「はい！」

美遊「分かりました」

注意するアーチャーにジャックとイリヤ、美遊が代表で答えた後に行くぞと言うアーチャーを先頭に歩き出す。

クロ「それにしても何処にあるのかしら祠は」

ノワール「一応貰った地図によるとこの先っぽいけど」

後ろで歩きながら呟くクロにノワールがモリアーティやアンデルセンが書いた地図を見ながら呟く。

ジャック「もうすぐだといいいね！」

ルビー「このペースで行けると良いんですけどね」

楽しげに言うジャックのにルビーはそう言う。

イリヤ「フラグ建てないでよルビー!？」

サファイア「そうですね。こういう状況だとそれは一番やばいですよ」

それにイリヤとサファイアが注意し、ルビーはめんごめんごと謝る。

クロ「そのフラグ、来ないと良いわね」

ノワール「そうね」

クロとノワールも警戒しながら進んでいると…

ジャック「あ、あれ祠じゃない!？」

すると見えて来たのにジャックが指さす。

確かに祠があり、誰もが安堵の息を吐く。

イリヤ「良かったあ…無事に辿り着けた」

ルビー「良かったですね、フラグにならなくて」

言ったのルビーでしょとイリヤは軽く小突く中でアーチャーは慎

重に近づく。

ジャック「どきどき…どきどき…」

誰もが見守る中でアーチャーは開こうとして…すぐさまその場を後ろに飛び退ると地面から何かが飛び出す。

美遊「何か出てきた!?!」

ルビー「ああつと、フラグ成立ですね」

言ってる場合じゃないでしょ!?!と言ってる間にモグラの様な魔物がグルルと唸る。

アーチャー「どうやら魔力で変質したモグラみたいだな」

イリヤ「モグラ!?!」

うええ!?!となっている間にアーチャーはゲーマドライバーを装着してガシャットギアデュアルβのダイヤルをタドルファンタジーの方に回す。

タドルファンタジー!

Let's Going King of Fantasy!

アーチャー「変身!」

音声が鳴り響く中でドライバーにガシャットデュアルβを装填する。

デュアルアップ!

タドルメグルRPG!タドルファンタジー!

鳴り響く音楽の中でアーチャーはブレイブ ファンタジーゲーマーになる。

ズボツ!

イリヤ「あ、潜っちゃった!?!」

ブレイブ「皆、足元に気を付けるんだ!不意打ちしてくる可能性が高いからな!」

ガシャコンソード!

再び地中に潜る巨大モグラにブレイブはイリヤ達へ注意しながら警戒する。

美遊「は、はい!」

ジャック「警戒するよ!」

指示にイリヤ達も警戒する中で地面が盛り出す。

ルビー「イリヤさん！あちらから来ますよ！」

サファイア「すぐに回避してください！」

うえ!?と驚きながらイリヤやジャックがその場から飛び退るとモグラが飛び出す。

美遊「出てきた！」

クロ「やっちゃえアーチャーさん」

ブレイブ「まあ、戦えるのは私しかないからな」

そう言いながらブレイブは自分に振り下ろされた右腕をガシャコンソードで受け止めてから弾き飛ばして、左腕の薙ぎ払いから避ける。

美遊「拮抗してる…」

激しくぶつかりあっている様子に美遊とイリヤは息を飲む。

ノワール「あのモグラ、なかなか強いわね」

クロ「ホント、ただけ魔力に犯されたらこうなるのよ」

コ・チーン！

思わずぼやく中でブレイブはガシャコンソードを炎から氷に変えた後に地面に突き刺して辺りを凍らせ、モグラも同時に氷で動きを封じる。

ジャック「動きが止まった！」

イリヤ「今なら！」

それを見てブレイブもまたドライバーのレバーを開閉する。

ガチャーン！

キメワザ！

それを見てモグラは逃げようともがく。

ルビー「これは決まります！」

クロ「行っちゃえ！」

タドル！クリティカルスラッシュ!!

ブレイブ「おおおおお!!」

その言葉を背にブレイブは駆け出してモグラを両断する。

そのままモグラは消滅していく。

ブレイブ「(今のは…)」

イリヤ「やった！倒した！」

誰もが喜ぶ中でブレイブは少し違和感を持つ。

先程の手応えが妙に軽いのだ。

まるで幻の様な感じであった。

ジャック「これで祠に近づけるね」

ルビー「ではでは！祠を開けましょうね！」

考え込んでる間に子供メンバーは祠へと近づいて扉を開ける。

ブレイブ「こらこら、警戒しながら開けたまえ！」

イリヤ「ルビーも勝手に行かないの！」

慌てて近づいた所、何事もなく、安堵した所で見つけ！とジャック

が石を見せる。

ノワール「これで残りは3つになったわね」

クロ「他の皆と合流しましょうか」

そうだねとイリヤが同意した後を考え込んでいるブレイブに気づく。

イリヤ「アーチャーさん？どうかしたの？」

ブレイブ「ん？ああ、どうもさっきの魔物は手応えが無さすぎる気がしてな…」

質問するイリヤにブレイブはそう返す。

ジャック「そう言えば今までのと比べたら…」

ノワール「確かに呆気なかったわね」

言われた事で疑問に思った子供メンバーはなんでだろうと首を傾げる。

ブレイブ「考えられるのは…あれは本体ではなく分身ではないかと言っ所だな」

ルビー「そうだとするとまだ本体が隠れているかもしれないですね」

サファイア「ですがどこに隠れているんでしょう？」

周りを確認するが襲い掛かってくる気配はない。

ジャック「出てこないね…」

イリヤ「ここにはいないって感じなのかな？」

誰もがそれに不気味がる中でブレイブが手を叩く。

ブレイブ「とにかく合流を急ごう。このままいても進まないからな」

美遊「そうですね。この場から離れよう」

ブレイブの促しに誰もが賛成して歩き出す。

しばらくして…

イリヤ「…付いてきたりしてないよね？モグラ」

不安げに聞くイリヤに最後尾に立っていたブレイブがそれなんだが…と口を開く。

ブレイブ「時たま振り返っては必殺技で地中の所まで斬撃を叩き込んでみたが反応はなかった。

ルビー「ああ、だから時たま音がしたのと、一直線に出来た線の様な穴が出来てるんですね」

イリヤ「い、何時の間に…」

ノワール「けど、それだけ攻撃されてるのに出てこないって事は本当にいないのかしら」

そう呟いた後におーいと言う声が聞こえる。

イリヤ「あ、今の声って…！」

よく見ると合流場所で守理と刹那が手を振っていた。

美遊「刹那お姉さん！守理お姉さん！」

ジャック「ただいま〜」

駆け寄るとアンリマユ達もおり、どうやら無事に取れたみたいだ。

守理「そっちは大丈夫だった？」

刹那「こっちはぼっちり回収できたよ」

アンリマユ「お、そっちもゲット出来たかくこっちもだぜ」

モリアーティ「これで残るはあと一つとなったわけだ」

誰もが安堵する中で変身を解除したアーチャーが口を開く。

アーチャー「すまないが、どっちとも、何か不思議な生物と対面してないか？」

アンリマユ「ああ、それならしたぜ。俺より弱かった大きいトカゲ」

ティーチ「拙者たちは亀でしたな。動きが遅かったので普通に倒せましたぞ」

質問された事にアンリマユとティーチが答える。

イリヤ「こっちはモグラだったんだけど…」

刹那「それが倒したかどうか微妙な感じなんだよね」

モリアーティ「そちらもか…そうなるのであれば幻影の可能性があるね。本体は別にいてどこかにいる可能性があるかもしれない」

そう推測するモリアーティのに誰もがありえそうだと思った。

アンデルセン「ただ、慎重になり過ぎるのは島を抜け出す時間を延期していくだけだ。ここは最後の1つに向かうべきだな」

美遊「いよいよあと一つ…」

ノワール「そこにも何かが待ち受けてそうね」

気を引き締める面々はノワールのに確かにと頷く。

守理「モグラにトカゲ、亀となると次は何が来るかな？」

刹那「あまり統一性がないからわからないね」

うーむと唸りながら最後の待ち受けてそうなのを考える。

アンリマユ「意外な奴がいるかもしれないなく例えばツチノコとか」

アーチャー「意外過ぎではないかそれは；」

イリヤ「私もそう思う…」

にししと笑って言ったアンリマユのにアーチャーとイリヤはジト目で返す。

キアラ「でしたら触手とか」

ヘブンズ「ああ、ありえそうですね」

アンデルセン「お前等のも普通にありえん…と言えんくそ！」

ドレイク「魔神柱みたいなのもありえるしねえ」

そう言った変態2人のにアンデルセンは悔しげに吐き捨て、ドレイクの意見を出す。

モリアーティ「まあ取りあえず行ってみないと分からないしね」

そんな面々のを聞きながらモリアーティはそう言ってから魔物について終わりにする。

話し合った後にひとまず明日にして各々に眠りに付く。

寝転がりながら守理は刹那に話しかける

守理「ねえ刹那…まさかこうなるとは思ひもしなかったね」

刹那「そうだね。でももうすぐ帰れるね」

うんと頷いた後に守理は天井を見る。

守理「…マシユたち大丈夫かな…」

刹那「早く会いたいね…」

イリヤ「そうだね…凜さん達もどうしてるかな…」

寂しげに呟くイリヤにアイリは抱き締める。

アイリ「大丈夫。皆がいるから無事に帰れるわ」

イリヤ「あ、ママ…」

よしよしと頭を撫でてくれるアイリにイリヤは彼女の胸に顔をうずめる。

美遊「(イリヤ、ちょっとかわいい…)」

クロ「(羨ましいいわね)」

それに美遊は頬を赤らめ、クロも羨ましそうに見ているとアイリが気づいてカムカムと誘う。

クロ「(…あ、ありがとママ)」

それにクロも恥ずかしそうにしながら近づいて抱き締められる。

ノワールも誘われてたが今回は2人に譲ると首を横に振る。

ノワール「(なんだか本当の姉妹みたいね。そう考えると本当に羨ましいな…)」

抱き締められてる2人にノワールは見ているとアイリが声を出さずに口を動かす。

その動きを見てノワールは苦笑する。

明日に抱き締めてあげると…

ノワール「(…もう、ママったら)」

気遣ってくれる母にノワールはふふっと笑った後に眠りに付く。

いよいよ戻れる日は近づいている。

第八話く巨大避役（カメレオン）く

守理「最後の祠目指して行くぞく」

ジャック&イリヤ「おー！」

元気よく言う守理に返事するジャックとイリヤに刹那はふふと笑う。

モリアーティ「その最後の祠の欠片さえゲット出来ればこの島を覆っているのがある場所が分かり…」

ドレイク「それを壊せばあたしたちの宝具が使える様になる！」

アーチャー「気合を入れて行こう」

誰もが頷いた後に出発する。

☆

アンリマユ「さて、出発したけど、何もなければ良いな」

ノワール「でもそれってかなり低い確率よね」

歩きながら言うアンリマユのにノワールは肩を竦めて返す。

ティーチ「確かに、何かが襲い掛かってもおかしくありませんからな」

美遊「そうだよね…」

サファイア「注意に越した事はないですね美遊様」

誰もが周りを警戒する中で近づいた所で3人は各々にライダーの姿になる。

ブレイブ「さて、ここからは私が先頭、ヴィランは列の中央、スナイプは殿を頼む」

スナイプ「了解ですぞ」

ヴィラン「あいよく」

クロ「これなら上下から来ない限り安心できるわね」

指示するブレイブに了承する2人のを聞きながらクロはそう呟く。

アイリ「魔物が鳥とかだったら上から来るわね」

イリヤ「ああ、確かにありえそうだね。あれ、そうなると空中戦出来るの…」

スナイプ「拙者だけですな」

うわあ…とイリヤは鳥でもない事や地下から来ない事も祈る。

モリアーティ「ふむ最後の祠はこの先か…」
アンデルセン「今の所異常なしだな」

地図を見ながら呟くモリアーティのを聞きながらアンデルセンはキアラに肩車して貰い、遠くを見ながら呟く。

刹那「異常なしなのがなんか怪しいよね…」

守理「だよね…気味悪いね…」

ひゅん！

少し怖がっていた守理は何かが通り過ぎた様な感じがした後は何やら胸がスースーする様な感じがしてどうしたのかなと見て…顔を真っ赤にする。

なぜなら…着ていた筈の上の服がないのだ。

守理「ひゃあああああああああ!!?」

マルタ「マスター!?!男どもは見ると理由はマスターの服が消えた!」

ヴィラン「イエスマム!」

スナイプ「と言うか服が消えたですと!?!」

ルビー「あ、イリヤさん、あそこ!」

悲鳴に驚いたがマルタの指示の後のルビーの言葉に誰もが見る。

そこにいたのは…

ヴィラン「ありやあ…カメレオンか?」

ブレイブ「成程、風景に溶け込んでいたか…!」

刹那「あ、口に守理ちゃんの服啜ってる」

マルタ「よし、あいつを殴ればいいのね」

存在していたのにマルタはボキボキ慣らしながら近づこうとする。

ヴィラン「OK、落ち着こうぜ姐さん」

スナイプ「そうでござる。マルタ氏と言えぞ今の状態では危ないですぞ!」

イリヤ「ここはアーチャーさん達に任せませんか!?!」

ノワール「そうそう、今は普通の女性なんだし」

落ち着かせてから前に出た3人は駆け出す。

カメレオンはそれを見て姿を消すが…

スナイプ「守理殿の服で位置バレバレですぞ!!」

その言葉と共に放たれた銃弾が守理の服が浮かぶ所で火花を散らし、カメレオンは呻きながら姿を現す。

ヴィラン「あーらよつと!」

再び姿を消すが続け様にヴィランがパンチやキックを叩き込み、ブレイブが斬撃を決めて行く。

その際に舌が切れたのか守理の服が舞い、マルタはそれをキャッチする。

モリアーティ「ナイスキャッチだ」

サファイア「しかし、今回もまた手応えがなさそうですね」

褒めるモリアーティの後にサファイアは倒されて消えていくカメレオンを見ながら呟く。

せつな…

マルタ「!ふん!」

何かに気づいたマルタがしゃがんだ後にしゃがむ前にあつた胸部分の所に手を伸ばして何かを掴む。

すると舌を掴まれてジタバタもがくカメレオンが姿を現す。

スナイプ「うっわ…」

ブレイブ「成程…これはまた…てこずりそうだ…」

その後周囲に現れたカメレオンの集団にスナイプとブレイブはげんなりする。

守理「多い多い多い!」

イリヤ「何この数!?!」

ルビー「うわあ、今までとは違う質より量ですね」

その数に守理とイリヤが絶叫する中でカメレオンは舌を伸ばす。

守理「あぶなっ!?!」

キアラ「あらあら」

慌てて避ける中でカメレオン達は女性陣を狙う。

それに離れたモリアーティはなん?と首を傾げる。

モリアーティ「女性だけを狙ってないか?あのカメレオンたち」

ルビー「あー…これは…もしかして…」

スナイプ「オツフ…なんとなく察しがついてしまいましたぞ」
そんなモリアーティのルビーと撃ち抜きながらスナイプは困った様に漏らす。

放り投げられたアンデルセンや攻撃しているブレイブやヴィランよりも守理達を狙っているのにモリアーティはまさかとルビーとスナイプを見る。

モリアーティ「このカメレオン、もしかしてその、狙っちゃってる？」

ルビー&スナイプ「生贄的な意味でもそうですね」

守理「それは嫌だ!!」

刹那「アーチャーさん！何とかしてこいつら！」

ブレイブ「そうしたいの所なのだが…！」

ヴィラン「こいつら、俺の様に弱いけど数が多いから苦勞するぜ！」
退治して欲しいと頼み込む2人にブレイブとヴィランはカメレオン達を倒しながらそう返す。

スナイプ「と言うか、こいつ等、とことん増えておりますぞ!!」

ルビー「もしかして本体がどんどん分身を繰り返しているんですかね？」

モリアーティ「これ以上長引くとやばいね…」

撃ち抜きながら叫ぶスナイプのルビーとモリアーティは呻く。

マルタ「こんのおおお!!」

すると、マルタが掴んだ舌を引っ張ってからカメレオンをハンマー投げの様に振り回す。

ヴィラン「わおう…」

イリヤ「す、すごーい…」

吹き飛んで行くカメレオン達にイリヤ達は啞然とする。

その間にカメレオン達はドンドン数が減って行く。

ブレイブ「この調子で進むぞ！祠まで走るんだ！」

クロ「ええ！」

ノワール「分かったわ！」

両断しながら叫ぶブレイブに振り回すマルタを先頭に守理達は駆

け出す。

追いかけてようとするカメレオン達をスナイプが撃ち抜いて行き、左右のをヴィランとブレイブが対処する。

ドレイク「後どれ位だい！」

モリアーティ「もう少しだ！」

必死に走り、カメレオンが少なくなっただけで行った所で祠が見え始めた。

守理「見えた！」

刹那「すぐに欠片を取ろう！」

そのまま祠に駆け寄り、後ろを振り返ると奇妙な光景を目にする。カメレオン達がジタバタもがいた様に動いた後に去って行ったのだ。

ヴィラン「なんだ？いきなり帰って行ったぞ？」

刹那「もしかして祠には近づけないのかな？」

その様子に刹那は首を傾げる中でふむとアンデルセンは顎を摩りながら推測を述べる。

アンデルセン「不思議だったが…もしかすると、祠や家のに使われていた木は獣を近づかせない特殊な臭いを発してるんじゃないか？人間には感じ取れない感じのな」

モリアーティ「それで近寄れないからあの村に獣たちは寄って来なかったのにも納得がいくね」

ありえるね…と祠を触りながらモリアーティは呟いた後に扉を開ける。

刹那「あつた！最後の欠片だ！」

取められていたのに刹那はモリアーティと共に今まで集めていたのと組み合わせる。

モリアーティ「これが此処で…できたぞ」

最後の填めると共に石板となり、装置の場所はと見ようとし…

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

ブレイブ「ぬっ!？」

イリヤ「な、なに!？」

突然起き出した揺れに倒れそうになったイリヤを支えながらブレイブは周りを見る。

アガツチャ!

ジェット! ジェット! イン・ザ・スカイ! ジェット! ジェット!
ジェットコンバット!

スナイプ「ああ!? 皆さん方! あっち! あっちを見るでござる!! 拙者たちが最初に漂流した海岸の方!」

飛び上がって周りを見ていたスナイプが叫び、スナイプの示した方を見る。

ゴゴゴゴゴゴ!!

するとせり上がる建物が目に入る。

マルタ「あれは…神殿!?!」

美遊「私たちが流れ着いたところに隠してあったんだ…!」

目を見開いて驚く中で揺れが収まる。

ノワール「揺れが収まったわね…」

クロ「んで、目的の奴は絶対にあそこよね…」

ふうと息を吐いた後にクロは神殿を見て呟く。

モリアーティ「おそらく罫が多く仕掛けてあるだろう。ここは念入りに準備して向かった方がよいだろうネ」

マルタ「そうね。何かあるか分からないし、その方が良いかもね」

提案するモリアーティに誰もが同意した後に活動拠点へと戻る。

その際、帰る道ではカメレオン達の襲撃はなかった。

守理「あんなにいたのに来なくなつたね」

刹那「もしかして神殿の方行っていたりして」

ブレイブ「あるいは…私達を迎え撃つために、本体が分身に回していたのを自分のに戻したかだ」

呟いた守理と刹那のにブレイブはそう返す。

モリアーティ「これはより念入りに準備をしないといけなくなつたネ」

イリヤ「そうですね…何かあるんだろう…」

顎を摩りながらそう言うモリアーティにイリヤはごくりと息を飲

む。

ドレイク「まあ何があるかは行ってみないと分かんないし、心配するのは行つてからでも遅くはないしね」

ルビー「そうですねすよく沈んでたんですし、猛獣とか罨なんて少ないでしょうし」

アンデルセン「貴様はフラグを建てんといられんのかバカステツキ」

かんらかんら笑うドレイクの後のルビーのにアンデルセンが呆れた顔でため息を吐く。

イリヤ「お願いだからしばらく黙っててねルビー」

刹那「質悪いからね遺跡の罨や猛獣は；」

それにイリヤはギュつと握り締め、刹那は疲れた顔で呟く。

ヴィラン「いやー色々と準備するのが大変だな」

クロ「まあこれが最後なんだし、早く帰ってお風呂入りたいわ」

その言葉に女性陣はあーとなる。

守理「確かに水浴びはしてるけどね…」

刹那「ちゃんとしたお風呂には入ってないよね」

思わず自分達の腕の匂いを嗅ぐ守理に刹那も頷きながら早く入りたいなと思った。

マルタ「しゆ、守理は良い匂いするから大丈夫よ」

ヴィラン「うーん、ホント姐さんマジ、マスターにご執心だこそ」

イリヤ「あははははは…」

少しはあはあしながら言うマルタにイリヤはかわいた笑いを出すしかなかった。

ブレイブ「とにかく英気を養って遺跡に向かおう」

イリヤ&美遊「はい！」

それぞれが準備に向かう中で刹那は遺跡を見る。

刹那「(あともう少し…あともう少しで帰れるから…待っててねマシユ)」

ギュつと握り締めて刹那は誓う。

最終日〜最後の番人と迎え〜

島を覆う魔力無効の結界を発動させているのがある遺跡が現れた。刹那達は入り口前に佇んでいた。

マルタ「近くから見ると改めてデカいわね」

イリヤ「大きい…！」

改めて傍に来た事でその大きさにイリヤは感嘆の声をあげる。

美遊「こんだけ大きいと中はどうなっているだろう…」

サファイア「気を付けて進んだ方が良いかと」

警戒する美遊のにサファイアはそういう。

ブレイブ「では、先頭は私が行くが、気を付けてくれ」

刹那「うん！分かったよアーチャーさん」

モリアーティ「しっかり頼んだよ」

突入前に変身済みなブレイブの注意に刹那は頷き、モリアーティが言った後に一同は遺跡へと足を踏み入れた。

スナイプ「ほへえ…状況が状況でなければ良く出来た建築物だと感心しますな」

沈んでいたが綺麗なままの状態にスナイプは感嘆の声を漏らす。

ドレイク「こりやかなりの技術で作られたもんだね」

ジャック「そうなんだ〜」

同じ様に感嘆の声を漏らすドレイクにジャックは分かかってない感じに返す。

アンデルセン「何も無ければ観光名所になってもおかしくないな…」

モリアーティ「観光名所にするにはちよつと危ないかもしれないぞ」

カチツ

ヒュバツ！

呆れた感じに呟いたアンデルセンのにモリアーティが言った瞬間、モリアーティの顔の前を何かが通過した後壁に突き刺さる。

それが矢だと認識されるのは少ししてからであった。

モリアーティ「やはり罨があつたか」

アンデルセン「何も無ければと言つたがやつぱりあつたか」

キアラ「これは慎重に行きませんといけませんね」

少し顔を青ざめて言うモリアーティにアンデルセンもやれやれと肩を竦めてる間に矢を撫でながらキアラは呟く。

クロ「あれは：落とし穴かしら？」

少し進むといかにも床が開きそうな部分があつた。

ヴィラン「うわあ、二重な罨の可能性ありえそうだな」

刹那「二重つて言うとは実はあの先にもう一つ落とし穴があるとか？」

それを見て呟くヴィランに刹那は想像して嫌だなと顔を顰める。

スナイプ「必殺技を撃つて穴があるか確認して見ましようか？」

イリヤ「お、お願いします」

守理「頼んだよティーチ」

確認するスナイプにイリヤや守理が代表で答え、刹那もお願いと承認したのを見てからガシヤットを差し込む。

ガシヤット！

キメワザ！

音声の後に落とし穴の先に狙いを付けてトリガーを引く。

バンバンクリティカルファイニッシュ！！

バシューーン！！

放たれた弾丸は床に炸裂すると穴が開き、ジェットコンバットを使用してレベル3になったスナイプは飛び上がって確認してから来る。

スナイプ「予想通り、下には串刺しのが用意されていたでござる」

アイリ「それは死にますね」

モリアーティ「だがこれで安心して進めるな」

慎重にスナイプに運んでもらつて落とし穴を越える。

ルビー「矢に落とし穴、次は何が来るんでしょうかね」

サファイア「姉さん、楽しんでませんか？」

ワクワクしてる感じに言うルビーにサファイアは呆れた感じに問う。

ルビー「えーそうでしょうか？」

イリヤ「止めてよルビー、こんな状況でふぎける感じになるのは」
注意するイリヤにルビーは「はい」と返す。

ノワール「不安ね…」

クロ「不安しかないわ…」

マルタ「本当に不安でしかないわ」

アンデルセン「ちゃんと見とけよ持ち主」

その様子に一部が不安を抱きながら進んで行く。

モリアーティ「む、これは見取り図か？」

しばらくすると壁部分に何か描かれていて、モリアーティは描かれ方からそう呟く。

守理「もし見取り図なら大助かりだね！」

刹那「えつと…私たちがここから入ったとして今はえつと…」

アンデルセン「ここだな。それでルートを見て行くとだな…」

ううんと唸っている刹那の隣でアンデルセンがサラサラつと何時の間にか持っていた紙と鉛筆で図を書き写して行く。

イリヤ「ここが中心部分なのかな？」

美遊「確かに他の所より大きく描かれてる…」

描かれた中で大きい部屋を指すイリヤに美遊もありそうだと賛同する。

モリアーティ「此処に行くにはどうやらこのルートが一番近いようだぞマスター」

刹那「このルートか…だけど」

描き終えたのを見て指さすモリアーティのに刹那は困った顔をす
る。

ブレイブ「そういうルート程、罫も尋常ではないだろうな」

言葉を引き継いだブレイブにそうであろうなとモリアーティも簡単に想像してたか肯定する。

ヴィラン「安全に行くなら遠回りだろうが…早めに帰りたいよな？」

イリヤ「うん。そうするとやっぱり…」

確認するヴィランにイリヤは頷いた後に覚悟を決めた刹那が言う。

刹那「最短ルートを進もう！」

守理「それしかないね！」

へブンズ「それに長年の間に安全な道に魔物がいる可能性もありませんからね」

うん！と頷いた後に最短ルートへと足を踏み入れる。

ドレイク「うおっと!?!いきなり来たようだよ！」

美遊「っ！」

伸びて来た槍にドレイクはギリギリ避け、美遊はスナイプに引つ張られて足元からの槍を避ける。

スナイプ「ギリギリセーフですぞ！」

美遊「あ、ありがとうございます」

ふひーと息を吐くスナイプに美遊はお礼を言う。

スナイプ「そう言つて貰えると拙者のテンションアップ！とにかくドンドン撃ち抜いて行きますぞ！」

そう言つてガシャコンマグナムで飛んで来る槍を撃ち抜いて壊して行く。

モリアーティ「次は上から来るぞ！」

ヴィラン「次は俺が頑張りますか！」

上からの槍にヴィランは右腕にエネルギーを付与して巨大な腕に変化させて薙ぎ払う。

刹那「おお！凄い！」

ヴィラン「へへんどうよ」

にひひと笑いながらヴィランは向かって来る罫をブレイブとスナイプと共に壊して行く。

しばらくすると広い場所に出る。

広い空間で悠々と飛べるだろう。

守理「ここが？」

アンデルセン「ルートを考えてここが最深部だろう」

モリアーティ「マスター、上を見てみるといい」

刹那「え？上？」

周りを見て呟く守理にアンデルセンは書き写したのを見ながらそう返し、見上げていたモリアーティのに刹那もつられて見る。

天井に大きな水晶が浮かんでいた。

刹那「大きな水晶だね…」

マルタ「あ、あれ！」

それにうわあと刹那は感嘆の声をあげた後にマルタが指さした所を見ると輝く魔法陣があった。

ブレイブ「きつとあれが…！」

イリヤ「AMFを発生させているんだ…！」

茨木「ふむ、つまりあれを壊せば吾等は普段の様に戦える様になれて島を脱出出来る訳だ」

早速3人は前に出て必殺技で水晶を破壊しようとし…

ギャオオオオオオオオン！！！！

マルタ「！」

ジャツク「今の声って…!?!」

美遊「あ、あれ!?!」

響き渡る咆哮に誰もが驚く中で美遊が奥を指す。

ズシン！ズシン！

ヴィラン「こりやまた…」

ノワール「おっきいのが来たわね…」

見えて来た姿に誰もが息を飲む。

現れたのは亀の体に顔と前足がモグラ、後ろ部分から伸びた尻尾に

トカゲとカメレオンの顔が付いていた。

アンデルセン「これはまたキメラだな…」

クロ「随分とおかしなキメラね…」

アイリ「もしかしてこのキメラが日記に記されていた迷い込んだ動物のなれの果て？」

呆れた感じに言うアンデルセンとクロの隣でアイリはグルルと唸り声をあげるキメラを見て呟く。

ブレイブ「もしかすると、迷い込んだ動物を捕食して融合したのだろうか」

スナイプ「ありえそうですな…出てきた奴らはこやつ自身が生み出してたんでしような…この世のすべてに感謝を込めてな漫画に出た様な獣みたいなことをしやがりますな」

ルビー「つて来ますよ!?!」

その言葉と共に腕を振り下ろすキメラにそれぞれ散開して避ける。

ブレイブ「とにかく行くぞ!」

ヴィラン「あいよく!」

スナイプ「了解ですぞ!」

守理「3人とも頑張つて!」

刹那「これが最後の闘いだよ!」

応援と共に3人は散らばる。

レベル3となって上空に飛び上がって攻撃を仕掛けるスナイプだがキメラの固い甲羅に銃弾が弾かれる。

スナイプ「流石亀だけあつて固いですな…!」

呟いた後に伸びて来たトカゲのカミツキを避ける。

同じ様にヴィランはモグラの頭の上で殴っているが痛がる素振りを見せない。

ヴィラン「やべえな、こいつマジつええな…」

そう呟いた後に振り落とされない様にしがみ付く。

ブレイブも攻撃しているがダメージを与えられずにカメレオンの舌攻撃に吹き飛んで壁にぶつかる。

マルタ「つ、全然傷ついてないわ!」

イリヤ「凄い守備力…!」

見ている面々はキメラの固さに顔を顰める。

茨木「ええい!もどかしすぎるぞ!なんとかできんのか!」

守理「皆が参加する為にはあの水晶を破壊しないと…!」

刹那「でもどうやって…あ!」

守理の言葉に刹那は周りを見て柱を見つけて思いつく。

刹那「教授!あの柱を倒したら水晶割れないかな!」

モリアーティ「ふむ、ナイスなアイデアだマスター!どの角度で倒せばいいのかすぐに計算しよう!」

すぐさまモリアーティに指示を出してモリアーティも冷静に分析して計算を始める。

イリヤ「ど、どうですか？」

モリアーティ「……………！ティーチ！あの柱の根本で左側を狙うんだ！」

スナイプ「あの柱ですな！」

ガチューン！

ガシャット！

キメワザ！

指示にスナイプは狙いを定める。

キメラはさせないとカメレオンの下とトカゲの首を伸ばすが、ヴェランとブレイブが庇って遠ざける。

ジエット！クリティカルストライク！！

スナイプ「ファイヤー！！」

ガガガガガガガガ！！！！

ガトリングコンバットの掃射でスナイプは指示された柱の左側を破壊する。

バキツ！！

それにより柱は傾き、水晶へと向かって行き…

バカーン！！！！

柱は見事に水晶へとぶつかる。

ピシパキツ！

ぶつかると共に水晶にヒビが入って行き…

パキーン！！

崩壊して四散して行く。

それと共に周りの雰囲気が変わるのを感じた後…

マルタ「！来た来た！！！」

ドレイク「力が戻ってきたよ！」

それによりマルタ達は魔力が出せる様になるのを感じ取ってそれぞれ武器を構え、イリヤと美遊も変身する。

ギヤオオオオオオン！！！！

ラッシュを仕掛ける。

それにより甲羅にひび割れが起こる。

ヘブンズ「では…」

キアラ「私達も！」

その言葉と共にヘブンズとキアラがマルタの左右から掌底を連続で当てて行く。

アンデルセン「3か所同時に放たれる攻撃…流石に固くても一点集中を同時に受ければ…」

ノワール「そのダメージはとてつもないものになる！」

2人の言葉を示す様にひび割れが全身に伸びて行く。

ブレイブ「よし！最大攻撃を仕掛けるぞ！」

イリヤ「はい！」

美遊「わかりました」

ガシユーン！

ガシャット！

キメワザ！

ブレイブの号令と共にそれぞれ宝具や必殺技の体勢に入る。

ちなみにキアラとヘブンズはそれぞれ右腕と左腕に魔力を収束させている。

ドレイク「野郎ども、出番だよ！ 亡霊の王、嵐の夜、ワイルドハントの始まりだ!!」

モリアーティ「宝具開放！ 我が最終式、終局的犯罪をここに証明しよう」

茨木「クハハ…：：：姦計にて断たれ、戻りし身の右腕は怪異と成った！ 走れ、叢原火！」

ジャック「此こよりは地獄。 “わたしたち” は炎、雨、力——殺戮を此処に…：：：」

クロ&ノワール「山を抜き、水を割り、なお墜ちることなきその両翼…：：：」

魔力放出にキメラは慌てて攻撃を仕掛けようとするが遅く…
タドル！クリティカルスラッシュ！

ジェット！クリティカルストライク！！
デストロイ！クリティカルブレイク！！

モリアーティ「終局的犯罪（ザ・ダイナミクス・オブ・アン・アステロイド）！」

ジャック「解体聖母（マリア・ザ・リッパー）！」

茨木「羅生門大怨起（らしょうもんだいえんぎ）！」

クロ&ノワール「鶴翼三連！！」

美遊「六連砲射！！」

イリヤ「多元重奏飽和砲撃！！」

マルタ「タラスク！」

ヘブンズ&キアラ「はあ！」

ドドドドドドドドドド！！！！

砲弾や斬撃、鉄拳などの一斉攻撃にキメラはもがき続け、断末魔を上げた後にその身を膨れ上がらせ：

ドカーーーーン！！！！

爆発四散する。

爆風にアイリとブレイブが魔力壁を張って刹那と守理を守る。

アンデルセン「終わったな…」

イリヤ&美遊「お、終わった…」

爆発後を見て呟くアンデルセンの言葉にイリヤと美遊は緊張が解けてそのまま座り込む。

守理「これで後は…」

刹那「帰るだけだね」

お互いに笑い合った後に気が抜けて腰が抜けたイリヤと美遊をアーチャーとマルタがオンブして一同は外に出る。

それでドレイクの船で帰ろうとして…

茨木「む？」

クロ「あら？あれって…」

海の方を見ると何かが飛んで来るのに気づく。

段々と見えて来たのに守理と刹那は声をあげる。

守理「う、ウルトラマンティガ！！」

刹那「えええ!!」

なんで?と思っているとウルトラマンティガは刹那達の前に降り立ち、膝を付いて右手を降ろす。

開かれた右手にはマシユとスカサハがいた。

マシユ「先輩!!」

すぐさま刹那へと駆け寄って抱き着くマシユに刹那はおととよろけるが踏ん張る。

刹那「あれ?もしかしてこっちのマシユ!?!」

スカサハ「その通りだぞマスター、それと私もそうだ。彼にはあっち側から少し協力して貰ったのさ」

ティーチ「あ、このウルトラマンティガはやはりアステリオス殿でしたか」

驚く刹那にスカサハが答えた後にティーチは膝を付いているウルトラマンティガを見て、ウルトラマンティガは頷く。

スカサハ「大変だったぞ。船の沈没ニュースが流れてマシユや一部の面々がパニックになったりな…それで勧めた側としてもあっち側のカルデアに事情を説明して、手が空いていた彼に海を移動する手段として来て貰ったと言う所だ。下手な機械や宝具持ちよりも数段頼りになるからな」

アイリ「成程ね」

イリヤ「そうだったんだ…」

なぜここにいるかやどうしてウルトラマンティガで来たかななどを説明するスカサハに誰もが納得する。

理由について納得してる中でスカサハはふうと息を吐く。

スカサハ「ただ、ついでに船の沈んだ所に彼に潜って貰い、調べて貰ったんだが…ただの事故ではなかったのは驚きではあったがな…」

守理「え?」

アーチャー「どういう事かね?」

クロ「やっぱり魔術協会とかの作業だったの?」

正解だとクロのをスカサハは肯定するのにアーチャーは眉間を揉む。

アーチャー「成程、一般人であつた刹那の事を気に食わない者の仕業か…」

アンデルセン「やれやれ、本当に魔術師は碌な奴がないな…一部を除いて」

ノワール「ホントそうね」

茨木「ホント、人間は嫌なのが多いな」

うんざりとしてる中で地面に何かを書いていたスカサハはこれで良いなど呟いてから全員に振り向く。

スカサハ「さて、帰るとしよう。早く無事な顔を見せねばならないからな」

刹那「うん。そうだね」

数日も行方不明になつてたもんねとスカサハの言葉に刹那はこれから来るであろう面々を思い浮かべながら困つた顔をする。

早速ウルトラマンティガの手に全員乗り、乗つたのを確認し、立ち上がったウルトラマンティガは見上げた後…

ウルトラマンティガ「シユワ！」

飛び上がり、カルデアへと向かつて行く。

イリヤ「ようやく帰れるね美遊」

美遊「うん…あ、そう言えば牛さんたちのこと忘れてた」

ホツとしてから思い出す美遊にイリヤもあつとなる。

茨木「おお、そうだった！すっかり忘れていたぞ」

クロ「確かに、どうするの？」

スカサハ「ふふ、言うと思つたぞ。あちらのカルデアにいるリウナスから教わつた座標を記憶する魔法陣を無人島に描いておいたから同じのをカルデアに描けばちゃんと行けるから安心するが良い」

そう答えたスカサハに刹那と守理は驚く。

刹那「何時の間に!？」

ドレイク「ああ、そう言えば海岸近くの地面に何か書いてたね。あれがそうなのかい」

そう言う事だとふふとスカサハが笑う中でイリヤは飛んでいるウルトラマンティガの下にある海を見ていた。

するとイルカの大群の移動してる所が目に入る。

イリヤ「凄い！イルカの群れだ……！」

ルビー「おお、生で見るのは良いですね〜」

うわーと目を輝かせる子供達に刹那はふふふと笑う。

モリアーティ「なかなか刺激的な休暇になったなマスター」

刹那「はは……流石に何度も受けたくないけどね」

笑ってウインクするモリアーティに苦笑しながら返しつつ、刹那は

ウルトラマンティガの手から見える光景を楽しむのであった。

こうして刹那達と守理達の波乱万丈な無人島のは終わったのであった。